

富山県上市町

黒川遺跡群発掘調査報告書

黒川上山古墓群

黒川塚跡東遺跡

伝承 真興寺跡

日枝神社裏遺跡

円念寺山遺跡

2005年2月

上市町教育委員会

富山県上市町

黒川遺跡群発掘調査報告書

黒川上山古墓群

黒川塚跡東遺跡

伝承 真興寺跡

日枝神社裏遺跡

円念寺山遺跡

2005年2月

上市町教育委員会



1



2

1.遺跡遠景(背後に鶴岳を望む) 2.遺跡全景



1



2



3



4



5



6

1.金銅製独鉢杵 2.銅鏡 3.青白磁小壺 4.青白磁小杯 5.青白磁合子 6.青白磁棊花皿

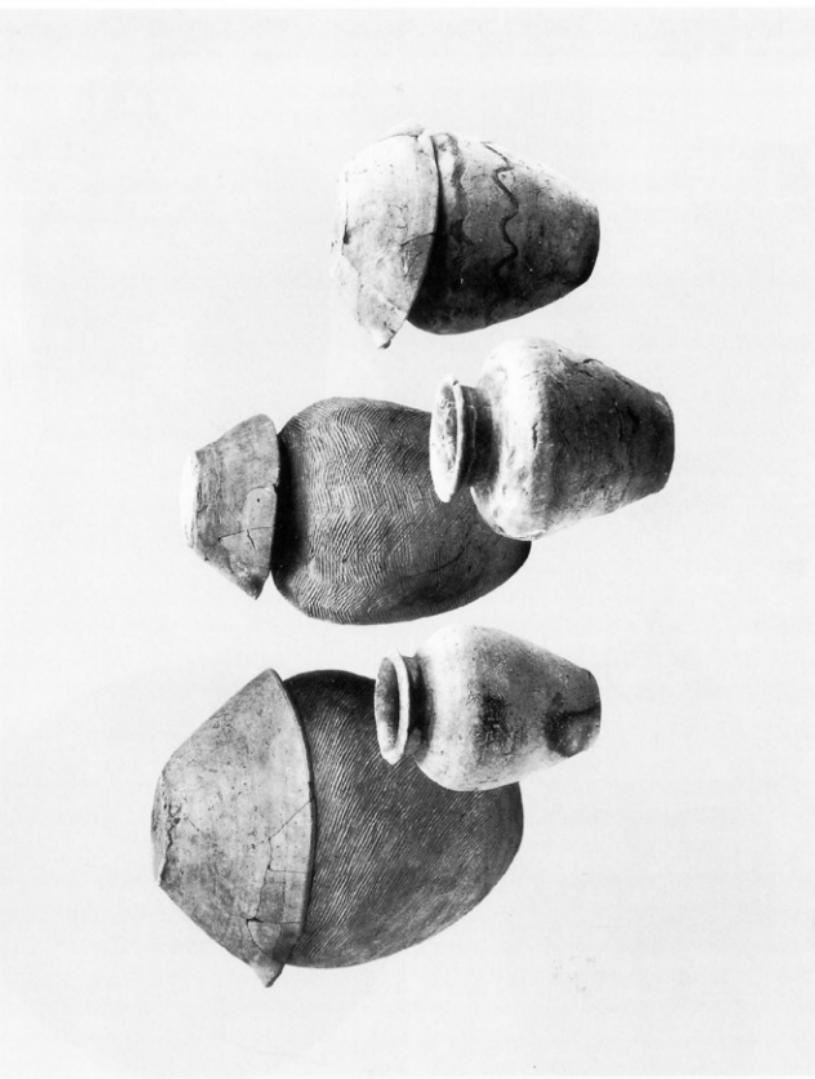


2



3

1.出土経筒外容器 2.3号経塚出土経筒外容器 3.同底面の銘



出土した骸骨器 (塗油)

序

上市町では、平成6年に下水道管理用道路敷設に伴う発掘調査で、12世紀末から14世紀までの中世墳丘墓群を調査しました。この遺跡が黒川上山古墓群であり、完全な形で今に残る全国でも稀な遺跡であることが判明しました。町ではその重要性から道路の方線変更を行い、全面的に遺跡を保存し、同年12月には上市町指定史跡として後世に残すことになりました。

上市町教育委員会ではこの遺跡を次代に残すため保存整備をする予定がありますが、その資料作成のための発掘調査を平成8年度より国庫補助を得て計画的に行ってきました。

以来10ヵ年10次にわたる調査で黒川上山古墓群（中世墳丘墓群）・黒川塚跡東遺跡（僧坊跡）・伝承 貞興寺跡（山寺）・日枝神社裏遺跡（僧坊跡）・円念寺山遺跡（經塚群）・護摩堂村巻遺跡・護摩堂曲戸遺跡・黒川岸天遺跡など12世紀後半から15世紀に及ぶ同時代の宗教関係遺跡が次々と姿を現し、付近一帯が中世の一大靈場であったことが明らかとなりました。また、周辺調査の結果、鶴岳・立山を中心とする立山信仰にも関連する遺跡群であった可能性が示されました。

調査は、平成6年6月から平成17年2月に至る今日まで続いているが、この間に掲り出された資料が上市町及び富山県の歴史を物語るよですがとなれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり多くなご指導をいただきました文化庁記念物課、富山県文化財課、富山県埋蔵文化財センター、富山考古学会、黒川地区のみなさま、また平成14年度から調査指導をいただいております、委員長の小島俊彰氏をはじめとする黒川地区中世宗教遺跡群保護調査委員会委員各位、さらにご指導ご助言をいただいた数多くのみなさまに心より感謝申し上げます。

平成17年2月

上市町教育委員会

例　　言

- 本書は富山県中新川郡上市町黒川地区内に所在する黒川遺跡群の発掘報告書である。本書に掲載した遺跡は黒川上山古墓群・黒川塚跡東遺跡・伝承真興寺跡・日枝神社裏遺跡・円念寺山遺跡の5遺跡であり、併せて周辺分布調査等の調査成果を収録した。
- 調査は、平成6年7月16日から実施しており平成16年度で10カ年を経過した。また、分布調査は富山大学人文学部考古学研究室の協力を得て、平成8年度から実施している。本書ではそのうち平成6年度から平成13年度までに行なわれた7次にわたる調査の結果を収録した。
- 調査面積は、平成6年度から平成13年度まで計約15,200m²、平成16年度までの総合計で約41,200m²である。
- 調査は、平成6年度は上市町が調査費用を捻出したが、平成8年度からは、国庫補助金・県費補助金を得て上市町教育委員会が実施した。
- 調査事務局は上市町教育委員会にあり、調査期間中、文化庁記念物課、富山県教育委員会文化財課、富山県埋蔵文化財センターの指導を受けた。事務及び調査担当は、年度ごと以下の通りである。

平成6・8年度	総括	生涯学習課長	神谷育雄
	事務・調査担当	生涯学習課文化振興係主任	高慶孝
平成9~11年度	総括	生涯学習課長	山口哲夫
	事務・調査担当	生涯学習課文化振興係長	高慶孝
		同	嘱託
平成12年度	総括	生涯学習課長	新本万里子(旧姓芳賀)
	事務・調査担当	生涯学習課文化振興係長	牧野茂雄
		同	嘱託
平成13・14年度	総括	生涯学習課長	廣瀬由樹
	事務・調査担当	生涯学習課文化振興係長	牧野茂雄
		同	嘱託
平成15年度	総括	教育委員会事務局長	高慶孝
	事務・調査担当	局長代理・文化振興係長	三浦知徳
		同	主事
平成16年度	総括	教育委員会事務局長	甚内昭悦
	事務・調査担当	局長代理・文化振興係長	三浦知徳
		同	主事
		同	三浦知徳

- 本書の編集・執筆は高慶・三浦が行ったが、「V 考察」については後述する黒川地区中世宗教遺跡群保護調査委員会の委員各位から手稿を賜った。また、本書のうち「IV 調査結果」についてはこれまでに刊行してきた「概報」を年次別に採録(一部改変)したものであり、その執筆・編集は各年次の調査担当者を中心として行なわれている。

- 平成14年11月8日に「黒川地区中世宗教遺跡群保護調査委員会」を発足し、遺跡群の保護と調査について貴重なご意見とご指導を得ている。組織は下記の通りである。

委員長	小島俊彰	金沢美術工芸大学教授・富山考古学会会長、考古
副委員長	久保尚文	富山大学非常勤講師・歴史・文獻
委員	宇野隆大	国際日本文化研究センター教授、考古
	岸本雅敏	富山県埋蔵文化財センター所長、考古
	久保智康	京都国立博物館学芸課工芸室長、考古・美術
	西井龍儀	富山考古学会副会長、考古
	福江充	富山県立山博物館学芸員、歴史
	山岸常人	京都大学大学院工学研究科助教授、建築
アドバイザー	伊藤清江(平成14・15年度)・舟嶋邦雄(平成15年度~)	富山県教育委員会文化財課課長、行政
	坂井秀弥	文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官、行政
顧問	水野正好	奈良大学文学部教授、考古
事務局	上市町教育委員会生涯学習課	(平成15年度より上市町教育委員会事務局文化振興係)

8. その他調査期間中及び本書の作成にあたり、下記の方々から有意義なご指導・助言並びにご協力を頂いた。記して深甚なる謝意としたい。

安念幹倫、池田恵子、池野正男、伊藤勝保、井原政昭、上野 章、河西健二、片岡英子、狩野 誉、京田良志、久々忠義、芦藤 隆、酒井重洋、柴垣智子、神保孝造、新本真之、関 清、田中幸生、辻本 浩、時枝 務、舟崎久雄、橋本正春、藤田富士夫、前川 要、松島吉信、漆 晨、三鍋秀典、宮田進一、村木二郎、桃野真晃、森沢佐蔵、山崎克巳、吉岡廉暢、渡辺 樹
（敬称・所属略、50音順）

9. 本遺跡群に係る普及啓発事業として、以下の事業を行った。

平成8年7月7日

上市町生涯学習推進大会 参加者約800名

水野正好氏（奈良大学）による講演「中世・越中の人々ーその死と祈りー」

平成11年7月

同日、黒川内会においても水野正好氏による黒川上山古墓群をめぐる講演会を開催
「つるぎふれあい館」ロビーにて黒川上山古墓群出土品の展示を開始。

平成13年10月14日

遺跡群活用事業「黒川フェスティバル」 参加者約1,000名

歴史講演：奈良大学 水野正好氏「中世の里、黒川郷を行く」

史跡見学会：黒川良安顕彰碑・穴の谷塚場・黒川上山古墓群・伝承真興寺跡

出土品展示：黒川上山古墓群・伝承真興寺跡・円念寺山遺跡

平成14年6月～翌2月

发掘された日本列島2002「新発見考古速報展」に円念寺山遺跡出土品を出展。

平成14年10月13日

「第2回黒川フェスティバル」 参加者約800名

歴史講演：国立歴史民俗博物館 村木二郎氏「極楽往生と絶縁」

史跡見学会：円念寺山遺跡・黒川上山古墓群・穴の谷塚場・黒川良安顕彰碑

出土品展示：黒川上山古墓群・伝承真興寺跡・円念寺山遺跡

平成15年3月～翌6月

弓の里歴史文化館開館記念特別企画展「中世のかみいちーその暮らしと祈り、そして戦いー」「祈り」の部で黒川地区中世宗教遺跡群の紹介と出土品を展示。

平成15年10月12日

「第3回黒川フェスティバル」 参加者約1,200名

歴史講演：佛俊・日本考古学协会会员 戸谷俊介氏「遺跡を旅する」

史跡見学会：黒川良安顕彰碑・穴の谷塚場・黒川上山古墓群・円念寺山遺跡・黒川良安墓碑

出土品展示：黒川上山古墓群・伝承真興寺跡・円念寺山遺跡

平成16年10月24日

「第4回黒川フェスティバル」 参加者約1,000名

歴史講演：富山県立山博物館 米原 寛氏「立山に向かう心象（こころのかたち）」

史跡見学会：黒川良安顕彰碑・穴の谷塚場・黒川上山古墓群・円念寺山遺跡・黒川良安墓碑

出土品展示：黒川上山古墓群・伝承真興寺跡・円念寺山遺跡

平成16年12月～翌3月

弓の里歴史文化館特別展「黒川遺宝展ーよみがえる中世叢場ー」

黒川地区中世宗教遺跡群の調査成果と出土品を一堂に会し公開。

10. 平成6年度～平成13年度の調査・整理参加者は下記の通りである。

阿部 来、荒木慎也、荒木智恵子、安瀬佳織、猪狩俊哉、石井勝代、石井淳平、磯村愛子、伊藤キミ子、伊藤萩子、伊藤ハチエ、伊東藤一、伊藤好子、井出靖夫、稻石純子、稻垣百合子、井原ミサヲ、岩城秀子、瓜生日奈子、大沢邦子、大沢徳雄、大沢富子、大奈司穂、太田朋美、太平奈央子、岡田 幸、小川卓哉、小栗由希代、小野 基、小幡鮎子、表原孝好、折田光子、鹿熊和雄、片桐清恵、加藤美生、金子みつゑ、金成淳一、神谷トシ子、河合 忍、川上 薫、川上富美子、川端良恵、北川康介、黒田恵美子、黒田キク、桑名マツエ、小松博幸、近藤美紀、酒井栄子、酒井啓子、酒井哲也、酒井文子、酒井ヨシイ、坂野井絆里、左近ナミキ、佐々木建二、佐々木亮二、篠野ミヨシ、佐藤絵理奈、佐藤聖子、澤井新三、澤野慶子、塙田和子、新宅山紀、甚内みき子、新本真之、鈴木和子、砂田晋司、根関章義、高城英子、高城せつ子、高城登志子、高城富美子、高城隼子、高田博文、高橋泰生、滝川邦彦、武田珠美、竹林昭夫、竹谷先生、田中俊輔、田中フミ子、田中洋一、田中好巳、谷口京子、塙田直哉、篠川貴祥、坪田聰子、蓬野いずみ、床平慎介、戸篠暢宏、中川セフ、中川美里子、中島和哉、中野秀昭、成川定信、西川文一、西本智子、丹羽直美、貫井美鉄、野中由希子、芳賀万里子、長谷川幸志、早川さやか、早崎秋子、林 昭男、阪 英子、平井晶子、平井淑子、平井文子、廣瀬直樹、福嶋祐介、福嶋佳典、不嶋美徳、細田隆博、本田亮久、真井田宏彰、前田尚美、松井早苗、松澤那々子、松本 茂、松本純一、松本スミ子、松本ミツ子、松森智彦、の場茂見、間野 連、宮田志保、三輪光子、向鶴 裕、森田カズ子、森田礼子、安村ミツ子、八巻謙司、山口欣志、山崎雅惠、山下 研、山本教幸、吉田盛太郎、吉村 晶、米出敬子、遊佐真一郎、若木啓子、渡辺 樹
（敬称略、50音順）

目 次

I 遺跡の環境	1
II 調査に至る経過	3
III 調査の経過	3
IV 調査結果	6
1. 平成6年度の調査	6
(1) 黒川上山古墓群の調査 (2) 黒川塚跡東遺跡の調査 (3) 調査の成果の整理 (4) 黒川上山古墓群出土の焼骨について (5) まとめ	
2. 平成8年度の調査	78
(1) 黒川上山古墓群の調査 (2) 調査の成果の整理 (3) まとめ	
3. 平成9年度の調査	128
(1) 黒川塚跡東遺跡の調査 (2) まとめ	
4. 平成10年度の調査	166
(1) 伝承真興寺跡の調査・分布調査(黒川地区山間部) (2) 真興寺跡の遺構配置について (3) まとめ	
5. 平成11年度の調査	212
(1) 伝承真興寺跡の調査 (2) 分布調査(開谷地区周辺) (3) まとめ	
6. 平成12年度の調査	254
(1) 日枝神社裏遺跡の調査 (2) 円念寺山遺跡の調査 (3) 分布調査(黒川地区穴の谷靈場周辺) (4) まとめ	
7. 平成13年度の調査	292
(1) 円念寺山遺跡の調査 (2) 分布調査(黒川～諏摩堂地区周辺) (3) まとめ (4) 円念寺山出土鉄鉢に対する自然科学的調査	
V 考 察	378
1. 遺跡の配置について(高慶 孝)	379
2. 円念寺山鉢塚出土の鉄鉢と磬について(久保智康)	381
3. GIS可視領域解析による劍岳・立山信仰の研究(宇野隆夫・山口歎志)	386
4. 黒川遺跡群の成立と変遷(高慶 孝)	393

図表・図版目次

卷頭図版

- 1 円念寺山遺跡（遠景・全景）
2 円念寺山遺跡（出土遺物）
3 円念寺山遺跡（出土遺物）
4 黒川上山古墓群（出土遺物）

I ~ III

- 第1図 地形と周辺の遺跡 2
第2図 遺跡周辺図 4
写真1 周辺航空写真 5

IV-1. 平成6年度の調査（概略、詳細は6ページ参照）

- 第1図 上山古墓群配置略図 21
第2図 「銀鉢草子」（河本家本）に見るさまざまな墓標（塔） 32
第3図 墓群全図 34
第4~17図 遺構実測図 36~48
第18図 黒川塚跡東遺跡地形図 49
付図1~2 黒川上山古墓群遺構配置図
第1表 墳丘墓の形態別比較 18
第2表 墳丘墓・土壙墓・集石墓 雜表 23
図1~5 No.2~1・④出土骨 29
表1~2 出土骨の量表 28
図版1 黒川上山古墓群周辺航空写真 50
図版2~10 遺物実測図 51~59
図版11~20 遺構写真 60~69
図版21~27 遺物写真 70~76

IV-2. 平成8年度の調査（概略、詳細は78ページ参照）

- 第1図 墓群全図 94
第2~6図 遺構実測図 95~104
第1表 墳丘墓の形態別比較 88
第2表 墳丘墓・集石墓・塔墓一覧 91
図版1 黒川上山古墓群周辺航空写真 106
図版2~7 遺構実測図 108~113
図版8~16 遺構写真 114~122
図版17~21 遺物写真 123~127

IV-3. 平成9年度の調査（概略、詳細は128ページ参照）

- 第1図 遺構全図 134
第2~5図 遺構実測図 136~140
図版1 黒川塚跡東遺跡周辺航空写真 142
図版2~4 遺物実測図 143~145
図版5~16 遺構写真 146~157
図版17~24 遺物写真 158~165

IV-4. 平成10年度の調査（概略、詳細は166ページ参照）

- 第1図 遺構全図 178
第2~3図 遺構実測図 180~182

- 第4図 黒川地区周辺遺跡（墓場関係）分布図 184
付図3~4 伝承真興寺跡周辺航空写真 186
図版1 伝承真興寺跡周辺航空写真 186
図版2~7 遺物実測図 188~193
図版8~19 遺構写真 194~205
図版20~25 遺物写真 206~211

IV-5. 平成11年度の調査（概略、詳細は212ページ参照）

- 第1図 遺構実測図（遺構全体図） 222
第2~3図 遺構実測図 224~226
第4図 黒川地区周辺遺跡（墓場関係）分布図 228
第5図 黒川地区周辺遺跡（平坦面6・11・12） 230
付図5 伝承真興寺跡周辺航空写真 232
図版1 伝承真興寺跡周辺航空写真 232
図版2~6 遺物実測図 233~237
図版7~16 遺構写真 238~247
図版17~22 遺物写真 248~253

IV-6. 平成12年度の調査（概略、詳細は254ページ参照）

- 第1図 日枝神社裏跡周辺航空写真 264
第2~3図 日枝神社裏跡周辺航空写真 266~268
第4図 円念寺山遺跡周辺遺構全體図 270
第5図 黒川地区周辺遺跡（墓場関係）分布図 272
図版1 日枝神社裏跡周辺、円念寺山遺跡周辺航空写真 274
図版2~6 遺物実測図 275~279
図版7~11 遺構写真 280~284
図版8~18 遺物写真 285~291

IV-7. 平成13年度の調査（概略、詳細は292ページ参照）

- 第1図 遺構全図 310
第2~22図 遺構実測図 312~330
第23図 黒川・謙堂堂地（周辺遺跡） 331
第24図 黒川・謙堂堂地周辺遺跡（墓場関係）分布図 332
第1表 円念寺山遺跡遺構一覧表 307
図版1 円念寺山遺跡周辺航空写真 334
図版2~12 遺物実測図 335~345
図版13~25 遺構写真 346~362
図版30~40 遺物写真 363~373
測像1~3 XRF分析装置・黒色物質採取箇所写真 374
図1~1~3 独特表面・独創黑色物質のXRFスペクトル 375~376
図2~1~3 黒色物質の赤外吸収スペクトル 377

V 考察（概略、詳細は378ページ参照）

- 第1回 高慶考察紹介 380
第2~7回 久保考察紹介 382~385
第8~26回 宇野考察紹介 388~392
第27~28回 高慶考察紹介 393~396
第1表 児川遺跡群と立山墓地の変遷比較 395

I 遺跡の環境

上市町黒川地区中世宗教遺跡群は、富山県中新川郡上市町黒川地内に所在する（第1図・第2図・写真1）。上市町は富山県の東南部に位置し、立山連峰に源を発する早月川、上市川、白岩川に沿って東南から北西にのびる町である。西は県都富山市、北は滑川市、南は立山町に接し、東側は標高2,999mの鶴岳をはじめとする北アルプスの山々が連なる。

本遺跡群は、これまで黒川上山古墓群（中世墳丘墓群）・黒川塚跡東遺跡（僧坊跡）・伝承真興寺跡（山寺）・日枝神社裏遺跡（僧坊跡）・円念寺山遺跡（経塚群）の5遺跡で発掘調査が行なわれ、その詳細が明らかになっている。これらの5遺跡はいずれも郷川が交地川・村下川に黒川集落東端で分流する地点を中心に半径1km以内に集中している。また、この範囲内にはもと行者窟で全国名水百選にも名を連ねる「穴の谷靈水」がある。

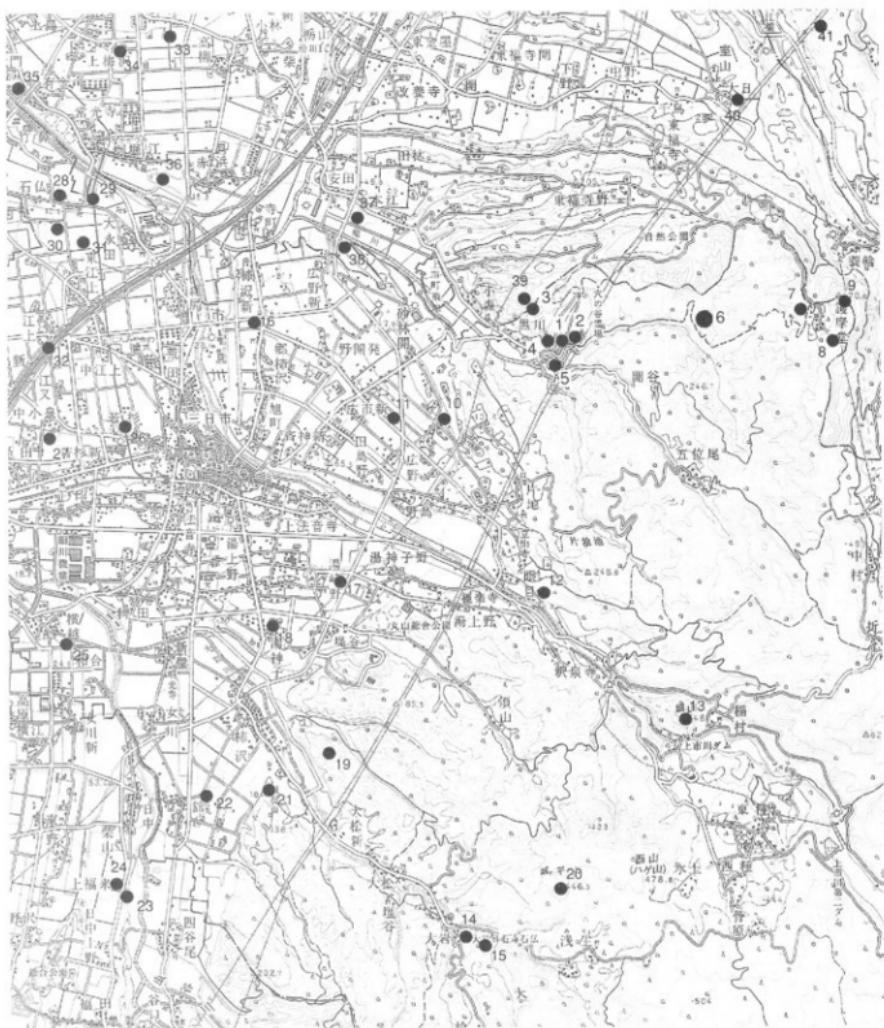
遺跡群は、12世紀後半から15世紀にかけてほぼ同時期に存在し、相互に関係を持っていたものと推察される。

黒川村にあった真言宗本覚院の寺伝によれば、本院は、亨保7年に僧・長玄によって開かれた。それ以前は、花崗山真興寺（真言寺院と考えられる）があったが富山に移転したためその跡を継いだと言われる。真興寺は寛弘5年（1008）に真興上人によって現在の本覚院裏手の山中（通称は古寺）に開かれたものと言われている。真興上人は、寛和2年（896）に弘法大師止錫の護摩堂村弘法堂を参拝、その帰りに籠の黒川に立ち寄り、この地を八正道を宣布するにふさわしい地であるとして庵を結んだと伝えられる。これにより最盛期にはここを中心に、円念寺・淨土寺・正寺寺・開谷には源内坊・奥野坊・作内坊・好田坊などができる、信仰の中心になったと言われる。黒川から護摩堂に至る道は、一部町道として残り、それに続く旧道も確認される（発掘調査以降改修中）。この道は、遺跡群の南直下を通過し護摩堂川を沢づたいに延びている。また遺跡からは護摩堂地区が見通せる位置であることも確認できた。

護摩堂の名は、今から約千年前に弘法大師空海が巡錨の折り、住民の幸せを祈って護摩を焚かれた事によるともいわれている。大和年間（1681～84）大岩山日石寺の住僧が大師の靈跡として堂宇を建立したとされる大師堂が現在でも残っている。標高は約400mで、付近からは富山平野と富山湾・能登半島を一望できる。

護摩堂背後の山地は標高約480mで、尾根上から鶴岳をはじめとする立山連峰が一望でき、尾根続きに早乙女岳・大日岳・室堂に至る。このことから黒川・護摩堂地区一帯は、中世密教の大きな靈場であり、靈場立山の入場口の1つであった可能性が大きくなつたものと考える。

町内及び周辺の古代から中・近世に至る宗教関係遺跡としては、市街地の南東に真言宗大岩山日石寺がある。この寺院は北陸有数の真言寺院で、開基は奈良時代まで遡るといわれ、本尊は奥岸佛の不動明王（国指定重要文化財）である。その裏山の京ヶ峰山頂には銅板製經筒及び外容器（珠洲壺）、銅鏡などが出土した大岩京ヶ峰經塚（12世紀後半）がある。また、市街地の東には曹洞宗の眼目山立山寺、南の立山町には日中玉橋經塚、日中東經塚がある。これら中世宗教遺跡のバックボーンをなすのが、文献上古代から中世に登場する堀江保・小森保あるいは堀江莊に関連するとみられる遺跡（江上B遺跡・東江上遺跡・上梅沢町遺跡・本江馬場田遺跡・横越遺跡など）、南北朝期から戦国時代まで中新川一帯に勢力のあった土肥氏をはじめとする豪族の城や居館跡（護摩堂城跡・福井城跡・郷津沢館跡・柿沢城跡・茗荷谷山城跡・郷田砦・弓庄城跡・千石山城跡・有金城跡・堀江城跡・堀の内城跡など）であり、これらの遺跡との関わりの中でその消長があったものと考えたい。このことから、平野部の遺跡との関連・山間部の城や寺院との関連も十分視野に入れると共に、密教における山岳信仰のあり方を十分に考慮に入れた調査が必要であり、中新川地区全体の中世遺跡の詳細な検討が必要である。



第1図 地形と周辺の遺跡 (1/50,000)

- 1.黒川上山古墓群, 2.黒川塚跡東道路, 3.伝水真興寺跡, 4.日枝神社裏道路, 5.黒川円念寺山遺跡, 6.黒川岸天遺跡, 7.護摩堂曲戸遺跡,
- 8.護摩堂村巻遺跡, 9.護摩堂城跡, 10.広野D遺跡, 11.広野C遺跡, 12.眼目山旧開山堂遺跡, 13.稻村山城跡, 14.大岩日石寺磨崖佛,
- 15.大岩京ヶ峰跡, 16.那村沢館跡, 17.湯崎野西道跡, 18.湯神子B遺跡, 19.椎沢城跡, 20.茗荷谷山城跡, 21.郷田營跡, 22.弓庄城跡,
- 23.日中玉橋経塚, 24.日中東経塚, 25.横越遺跡, 26.若杉神田遺跡, 27.中小泉東道路, 28.石仏遺跡, 29.石佐駒町遺跡, 30.石仏南遺跡,
- 31.大水田西遺跡, 32.江上B遺跡, 33.上梅沢町遺跡, 34.上梅沢道路, 35.金城跡, 36.堀江城跡, 37.本江馬場田遺跡, 38.金助山寺跡,
- 39.小森跡, 40.船の内城跡, 41.水尾南城跡

II 調査に至る経過

上市町黒川地区内では、平成5年度に農業集落排水事業の管理用道路が計画され、当該地区に所在する黒川上山古墓群の事前発掘調査が行われた。調査の結果、本遺跡が全国でも数少ない中世墳丘墓群で、墓数も40基を上回る極めて良好な遺跡であることが明らかとなった。上市町教育委員会は上級機関の指導のもと、県文化財保護審議委員湊辰氏（故人）・奈良大学学長（当時）水野正好氏に現地視察をお願いし、保存に関する意見をいただいた。この意見を元に、町当局と再度協議、地元黒川地区からの保存要請もあり、全面保存で合意した。その後同地内は平成6年12月8日町指定史跡として指定され、平成7年度には公有地化も図られた。平成8年度から国庫補助金・県費補助金を得て黒川上山古墓群の保存と一般公開のための資料収集を目的とする周辺調査を行っている。

III 調査の経過

調査は平成6年5月から平成16年度に至るまで継続しているが、平成8年度からは国庫補助金・県費補助金を得て上市町教育委員会が実施している。平成14年度には上市町黒川地区中世宗教遺跡群保護調査委員会を発足し、その意見を本に調査計画等を立て実施している。今回報告する平成6年度～平成13年度までの調査経過は次のとおり。

調査年度	調査期間	遺跡名	調査対象面積	内 容
平成6年度	5月～7月	黒川上山古墓群	約1,500m ²	13世紀代の墳墓22基を調査し、極めて良好な保存状態の中世墳丘墓群であることを確認した。また、調査区外でも多くの墳丘墓の存在を確認した。
平成8年度	11月～12月	黒川上山古墓群	約1,500m ²	45箇所の埋葬施設を検出し、全体で67基からなる大規模な中世墳丘墓群であることを確認した。また、本墓群が12世紀後半に成立／13世紀代に盛行／14世紀代に造営活動中断／15世紀初頭に再興・終焉、という過程を辿ることが判明した。
平成9年度	8月～10月	黒川塚跡東遺跡	約5,500m ²	平安時代のものと考えられる墳丘墓6基のほか、平坦面群、掘立柱建物跡、礎石、石垣などを検出した。
平成10年度	10月～翌3月	伝承真興寺跡	約3,200m ²	黒川山中において、真興僧都の開基と伝える「真興寺」に比定できる寺院跡を確認した（伝承真興寺跡）。本堂、塔、堂、山門、池などからなる伽藍の配置が明らかとなった。
平成11年度	9月～翌3月	伝承真興寺跡	約3,200m ²	本堂が2回の建て替えを経ていることが判明した。また、多量の土師質瓦と炭化物の入った土壙を検出した。
平成12年度	6月～翌3月	日枝神社裏遺跡	約1,500m ²	大規模な造成工事で造り出された平坦面、礎石、集石のほか、銅製鏡・鉄釘・土師質瓦・珠洲壺片を含めた鎮壇に関わると推定される土壙などを検出した。
		円念寺山遺跡	約1,500m ²	尾根上に連なる集石中から短刀や12世紀後半の珠洲が出土し、平安時代末期に築かれた経塚群であることが窺われた。また、その直下の崖面では行者窟を発見した。
平成13年度	6月～翌3月	円念寺山遺跡	約2,000m ²	少なくとも24基以上からなる国内屈指の大規模経塚群であることを確認した。また、金銀製独軒竹と銅磬が一括出土したほか、多数の短刀、輸入磁器製品、銅鏡、珠洲経筒外容器などが出土し、その内容においても突出したものであることが判明した。

第2図 遺跡周辺図(1/5,000)

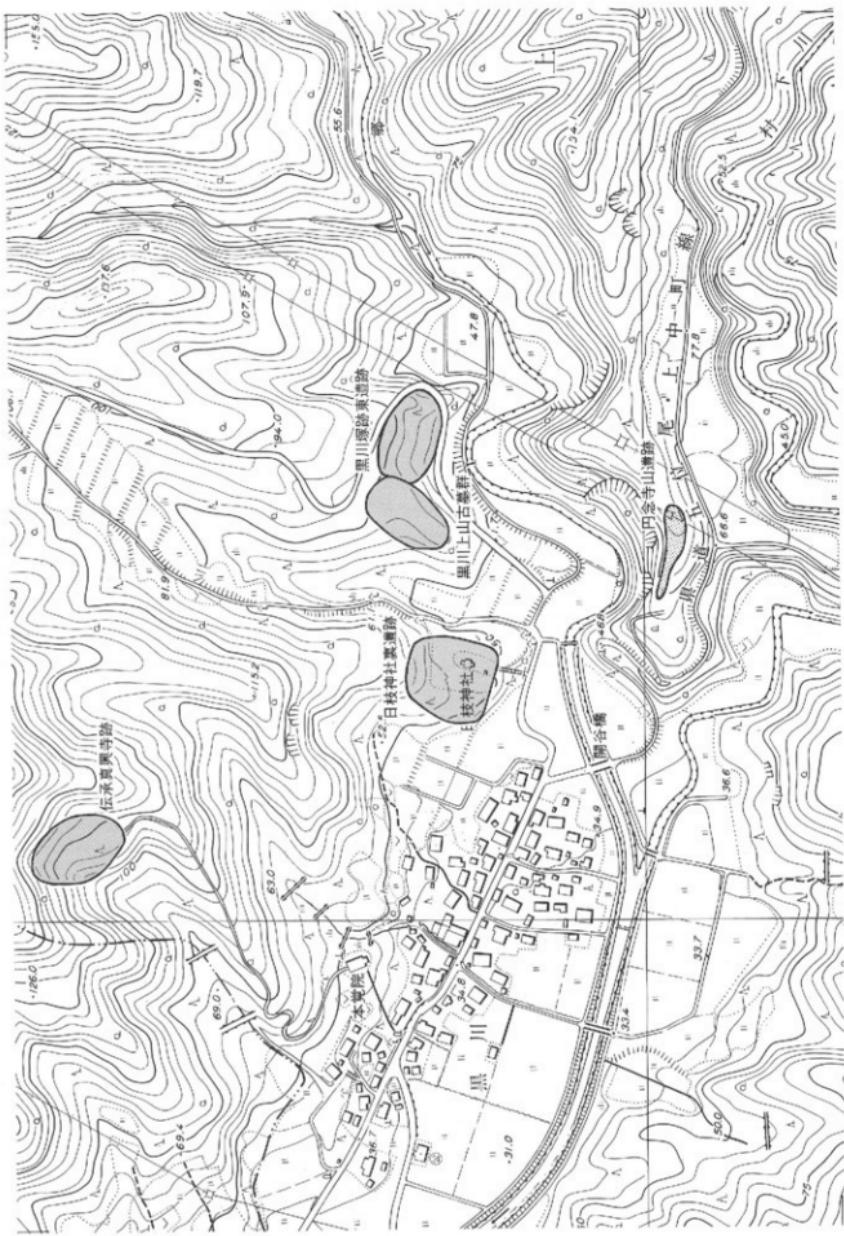




写真1 周辺航空写真(約1/6,000)

N 調査結果

1. 平成6年度の調査

(1) 黒川上山古墓群の調査	7
(2) 黒川塚跡東遺跡の調査	16
(3) 調査の成果の整理	17
(4) 黒川上山古墓群出土の焼骨について（森沢佐歳）	24
(5)まとめ	30
引用・参考文献	33

挿図・図版等目次

(1)～(3)(5)	50
第1図 上山古墓群配置略図	21
第2図 「銀鬼乍了」(河本家本)に見るさまざまな墓標(塔)	32
第3図 墓群全図	34
第4図 2号墓～3号墓実測図	36
第5図 5号墓～7号墓実測図	38
第6図 16号墓実測図	40
第7図 8号墓実測図	40
第8図 9号墓実測図	42
第9図 10号墓実測図	44
第10図 11号墓実測図	44
第11図 12号墓実測図	45
第12図 13号墓実測図	45 (4)
第13図 17号墓実測図	46
第14図 14号墓実測図	46
第15図 18号墓実測図	47
第16図 19号墓実測図	47
第17図 15号墓(集石)実測図	48
第18図 黒川塚跡東遺跡地形図	49
図版1 黒川上山古墓群周辺航空写真	51
図版2 遺物実測図(2号)	51
図版3 遺物実測図(1・2・1・2・2・3・1・6号)	52
図版4 遺物実測図(1・2・3・3・1・4・6・7・9・15号)	53
図版5 遺物実測図(1・2・2・3・4・8・15～18号)	54
図版6～8 遺物実測図(縄文上器時代遺物)	55～57
図版9～10 遺物実測図(黒川塚跡東遺跡)	58・59
図版11～20 遺構写真	60～69
図版21～27 遺物写真	70～76
表1 出土骨の重量(I)	28
表2 出土骨の重量(II)	28

付図1 黒川上山古墓群遺構配置図

付図2 黒川上山古墓群1号墓～7号墓配置図

第1表 墳丘墓の形態別比較 18

第2表 墳丘墓・土壤墓・集石・覧表 23

(1) 黒川上山古墓群の調査

1. 遺構（付図1・2、第3～17図、図版11～19）

調査により検出した遺構は、縄文時代と13世紀代の鎌倉時代に属するものである。遺構は、調査区全体で検出されるが、縄文時代の遺構は、ごく一部で検出されるのみで、明確なものはほとんど検出されない。

遺構が検出されるのは、標高69mから64mの舌状の丘陵端部の斜面上で、東西約34m、南北約52mの範囲にわたっている。墓群全体は、標高67mの等高線上で約1mの段差が設けられており、今回の調査では、この段差の北側を調査した。遺構全体は、動物などにより、若干削られたものがあるものの、ほとんど手付かずのまま残っており、非常によい残存状況を示している。

検出した遺構は、墳丘墓（石組みのあるものとないものがあるが墳丘をもつものをこの名称で呼ぶ。）19基、石組み遺構1基、土壙墓と思われるもの2基と、縄文中期前業と考えられる溝1条、穴12ヵ所である。

墳墓（付図1・2、第3～14図、図版11～19） 墳墓には平面形が方形のもの（13基）、長方形のもの（1基）、楕円形のもの（3基）、不整円形のもの（2基）の4種類がある。しかし、楕円や不整円のものであっても、石組みを施されたものは基本的に方形の石組みがなされており、18基が方形を基本として造営されている。この他、土壙墓（2基）などがある。

1号墓（付図1・2、図版12の3） X79218～79226、Y21406～21418に位置する。この墓群の北東端にあり位置からみて最も早い段階で造営されたものと考える。周囲にコの字状の周溝をもち、規模はこの周溝を含めて長軸10.50m短軸7.12mを測る。周溝底部から墳頂までの高さは1.05mである。南東側に2・3・4号墓があり、周溝はこの部分でとぎれている。築造当初は周溝がめぐっていた可能性があるが、今回の調査では確認していない。周溝の幅は、約1mで、断面形はU字状を呈する。墳頂部は3.08×2.36mの隅丸方形で、平坦面を作りだしている。この平坦面に主体部とみられる直徑約30cmの穴が2個みられ、周辺に焼骨片が散布している。墳頂に人頭大の石がみられたが、基本的にこの墓には石組み集石は施されていない。墓の正面は南西方向で、主軸は、墳頂でN28°-Eを測る。

2号墓から4号墓 1号墓の後に造営されたもので、ブロックとしてとらえられる墓群である。

2号墓（付図1・2、第4図、図版13の1～3） X79212～79218、Y21410～21416に位置する。1号墓に接して北西に造営されている。造営は切り合いから1号墓の後と考えられる。平面形は方形で、規模は東西5.11m、南北4.63m、高さ0.89mを測る。南側基底部に幅50cm、長さ4mにわたって扁平な石が並べられた張り出しが作られており、祭壇状の遺構と考えられる。墳墓全体に、拳大から人頭大の石が施されている。上部から2段の平坦面がありその平坦面が、埋葬の場となっている。平坦面は上の一段目が3.0m×2.26m、二段目が4.20m×3.47mの規模がある。一段目には主体部と思われる50cm四方の方形の区画があり焼骨片が散布している。二段目には全体に拳大の扁平な石が敷き詰められその中に蔵骨器による焼骨の埋葬が3ヵ所で確認された。これらの蔵骨器は、ほぼ完形で出土しており、珠洲焼の壺に同じく珠洲焼の擂鉢・鉢が蓋としてかぶせられたものである。珠洲焼の編年（吉岡1994）でⅡ～Ⅲ期（13世紀代）に比定されるが擂鉢のすり目や底部の状態から使用された痕跡があり、墓の造営時期とは若干のずれがあるものと考える。蔵骨器の、埋納は、墳丘に直接穴を開け埋めただけのものであるが、1ヵ所底面に扁平な石をおきその上に納めているものがあった。西南隅には五輪塔も検出された。石質は砂岩である。地輪・水輪・火輪で水輪に「ア」を意味する梵字が刻まれている。水輪に丸いぼぞが、火輪にぼぞ穴が付いており対応している。蔵骨器の傍らに立てられていたものと考えられる。なお五輪塔は、13世紀前半に比定される(I)。以上から、2号墓ははじめに一段目に骨をそのまま埋葬した時期と、蔵骨器を埋納した時期の2時期があるものと考える。見方を変えると、当初あった墳墓に後から平坦面と祭壇を付け足した可能性もある。後述する2-1・2-2号墓などが作り付けられており、後に手が入った

可能性が高い。なお、主軸に対する方位は墳頂部でN41° -Eである。

2-1号墓（付図1・2、第4図、図版13の1） X79212～79215、Y21415～21418に位置する。2号墓に増設される形で盛土が為され、縁石を方形に組んで形作られている。しかしながら、2号墓との境界を石列などにより分けることはされておらず、一見したところ、一对の施設と見れないこともない。縁石は人頭大の石と、50cm程度の横長の石を組合せて並べられている。上部は石が施されておらず主体部も明確なものが確認されない。しかし、骨片が散布しているのが確認できるため、焼骨を直葬したものと考える。規模は、 $2.80 \times 1.89m$ 、高さ0.56m、主軸に対する方位はN38° -Eである。

2-2号墓（付図1・2、第4図、図版13の4・5） X79212～79215、Y21415～21418に位置する。1号墓の東の土壘状の高まりの上に方形の配石を施して作られたもので規模は、 $2.00 \times 1.64m$ 、高さ0.4mである。この土壘状の高まりは、1号墓崩潰の排土を積み上げたものとみられ、これを利用していくつかの墓が作られたものと考えられ、珠洲焼の破片や焼骨が散布している。しかしながら、明確に確認できるものは、この1ヵ所のみである。埋葬は方形に組まれた石組み内に、蔵骨器を埋納するもので、珠洲焼の壺が使用されている。蓋は、失われているが、2号墓と同様なものと考える。珠洲焼は2号墓と同様珠洲焼の編年でⅡ～Ⅲ期（13世紀代）に比定される。なお、この土壘状の高まりの規模は $7.00 \times 3.06m$ 、高さ0.4mである。

3号墓（付図1・2、図版14の1～3） X79214～79220、Y21406～21411に位置する。1号墓と2号墓に接続して築かれている。2号墓とは一部窪みが設けてあり区画されるが、1号墓とは区画の縁石により区画される。この縁石は、1号墓墳丘裾の上に築かれ1号墓の後に3号墓が築かれているのが確認できる。規模は $4.28 \times 3.46m$ 、高さ0.65mである。縁石は、基底部・裾・上面に施されており、さらに主体部に約60cm四方の縁石がある。平面形は隅丸方形で前面は南側となる。上面は中央部に集石が $2.54 \times 2.42m$ の規模であり、東と西は集石が為されていない。主体部は一部動物などにより荒らされているようで、蔵骨器が散乱している。珠洲焼の擂鉢が元位置を保っているようであるが、一個体分のみ確認されるだけである。珠洲Ⅱ期のものと考えられる。

3-1号墓（付図1・2、第4図、図版14の4） X79216～79218、Y21411～21413に位置する。1号墓東南裾と2・3号墓に挟まれた部分に方形の区画縁石を施しただけのものである。2・3号墓が築かれた後に掘えられたものと考えられる。規模は、 $1.60 \times 1.43m$ では方形状である。主体部は蔵骨器によるもので、珠洲焼の小型の壺に扁平な石を蓋としてかぶせたものである。蔵骨器内には少量の骨が納められている。主軸に対する方位はN34° -Eである。

4号墓（付図1・2、第4図、図版14の1・5） X79218～79222、Y21410～21413に位置する。3号墓の西に接続する形でつくられているが、境界はやや窪んでいる。平面形は方形で、規模は、 $2.89 \times 2.73m$ 、高さ0.51mである。周囲に人頭大の縁石がめぐり、墳頂部は石がみられない。主体部は、径約30cm、深さ48cmの穴があけられているが、遺物などは確認できなかった。主軸の方向は、N47° -Eであった。

以上であるが、2号墓から4号墓までの造営の順序は2号墓・3号墓→4号墓→2-1号墓→2-2号墓→3-1号墓であると考えるが、2-1号墓・2-2号墓造営の際、2号墓にも手が加わったものと考えられる。

5・6・7号墓 2号墓から4号墓の南西に造営され、ブロックとしてとらえられる墓群である。

5号墓（付図1・2、第5図、図版15の1） X79208～79212、Y21410～21413に位置する。2号墓の南側にあり、平面形は不整円である。墳頂部に $1.7 \times 1.59m$ のほぼ方形の集石がなされ、その部分が主体部となっている。主軸の方向はこの主体部での計測で、N68° -Wである。規模は、 $4.56 \times 3.88m$ で、高さは、0.35mである。この墳墓の東側には幅約2m、長さ4mの溝状の遺構がある。これはその東にある墓道と考えられる平坦面との区画をするために意識的に設けられたものとみられる。深さは、墳頂部との比高差で約1m、墓道との比高差で約30cmである。主体部には、焼骨、土師質の小皿（かわらけ）が出土した。出土した骨は、茶色にふされたときの灰とともに埋葬されている。出土量は、

少量で、人体1体分はない。かわらけは3個体分の破片が出土している。時期は、13世紀前半のものと考えられる。

6号墓（付図1・2、第5図、図版15の2・3） X79211～79217、Y21403～21408に位置する。5号墓の西側にあり、北側は3号墓に接する。盛土の上に石積みを施すので、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は $5.49 \times 3.08m$ で、高さは、0.56mである。南側に幅0.6m、長さ2.2mの溝が設けられており、墓域の区画を意識しているものとみられる。5・6号墓との区画は、人頭大の石を用いた縁石で行なわれ、並んでいる。縁石は基底部、墳頂の平坦面、主体部の3列があり、間に詰め石が施されており、築造当初は全体が石で覆われていたものと考えられる。主体部のある上部平坦面は、 $3.58 \times 1.90m$ で、基底部の平面形にはほぼ対応する。主体部は、2ヵ所確認され、北側のものから第1主体、第2主体と名づけた。第1主体部は $0.8 \times 0.67m$ の方形の縁石で区画されている。深さは、約0.6mで円形に掘られている。中に焼骨と若干の炭化物が出土した。第2主体部は、 $1.12 \times 1.10m$ のほぼ方形の縁石で区画されている。第1主体と同様に内部は、円形に掘られている。深さは0.69mではほぼ同じ深さである。内部からは、灰とともに埋葬された、焼骨とかわらけが8点出土した。かわらけは13世紀前半に位置づけられるものと考えられる。第1主体と第2主体部は、切り合いがなく埋葬の順は判然としないが、上部の盛土からみて時期差はないものと考える。明確な長方形を呈する墓は、この例だけで、主体部のあり方を考える時、当初から2つの主体部を設けることを考慮に入れて検討されたものと考える。なお、主軸に対する方位は $N49^{\circ} - E$ である。

7号墓（付図1・2、第5図、図版15の4） X79214～79218、Y21401～21405に位置する。6号墓の西側にあるもので、墳丘裾が6号墓に削られている。墓の形態は楕円形の盛土で積み石などは行なわれていない。規模は $3.97 \times 3.45m$ である。墳丘上に大きな切り株があるため主体部は確認できなかったが、一部断ち切ったところ、かわらけ片2点と、須恵器の甕片が出土した。須恵器は、11世紀から12世紀代、かわらけは、13世紀前半のものと考えられる。主軸に対する方位は、 $N45^{\circ} - W$ で、6号墓とは直交することになり造営時期がこれらとは違うものと考える。

以上であるが、5号から7号墓までの造営の順序は切り合いから、7号墓→5号墓→6号墓であると考える。

8号墓（付図1、第7図、図版16の1～3） X79205～79208、Y21405～21409に位置する。5号墓と10号墓の間にあり、5号墓横の墓道の続きが南側を通る位置に築かれている。平面形は、楕円で、基本的に盛土による構築だが、墳頂部だけに方形の石組みが施されている。規模は $4.58 \times 3.63m$ 、高さ0.61mで、上部の方形の石組みは $1.33 \times 1.28m$ である。墳頂部では主体部が確認できなかったが、一部断ち切ったところ、ほぼ基底面と考えられる部分から、灰層が検出され、その中に8枚の土師質の皿が、ほぼ埋葬されたままの形で出土した。また付近から炭化物も少量出土した。このことから、この墓は、造営する基底面で葬送儀礼が行なわれ、その後、紛糾が築かれたものとみられ、墳丘に主体部を乗つものとの相違がみられる。かわらけの年代は、13世紀前半のものと考えるが、13世紀の初頭までさかのほるものかもしれない。方形の集石で見る主軸の方向は、 $N30^{\circ} - E$ で、1号墓に酷似しており、墓の造営方法などからみて、本墓群の中でもかなり早い時期の造営と考える。

9号墓（付図1、第8図、図版16の4） X79205～79208、Y21405～21409に位置する。8号墓の東側にあって全体の平面形は楕円である。規模は、 $11.40 \times 6.35m$ で、薄郡全体の中で最も大きな墳丘をもつものである。北と東側に周溝があり、低くなっている。周溝はめぐっていない。この段差は、墓群全体を大きく分けるもので、11号墓まで統く人為的なものである。この段の比高差は最も大きい場所で約1mある。墓の構造は、墳丘墓で、盛土による構築であるが、墳頂部に方形を意識した石組みがみられる。石組みの規模は $4.33 \times 2.85m$ である。石組みに使用されている石は、半大から、径50cm前後の大きなものまであるが方形を意識した区画を作りだしているのは、大きな凝灰岩である。主体部はこの方形の区画の中に径約1.2mの円形の掘り込みがある。深さは、約1mで、他の墳墓の主体部よりかなり大きい。出土遺物はないが、土葬の可能性の高い墳墓と考える。

10号墓（付図1、第9図、図版16の5） X79205～79209、Y21395～21398に位置する。9号墓の西にある墳丘墓で、盛土により構築されている。平面形は、ほぼ方形である。規模は $1.56 \times 1.41\text{m}$ で、高さは0.28mと小さいものである。しかしながら、周囲に若干の高まりがめぐり、人頭大の石がめぐる痕跡を残しており、その部分も墓域と考えるなら、規模は $3.42 \times 2.77\text{m}$ となる。主体部は、確認していないが、8号墓と同様の埋葬を考える。主軸に対する方位は、墳丘でN38°～Eである。

11号墓（付図1、第10図、図版17の1～3） X79210～79215、Y21390～21394に位置する。9・10号墓の北側にあって、墓群を区画する段差の斜面に構築されている。平面形は隅丸方形で、葺石状に方形の石組みが施されている。縁石は2段みられるが、基底部に縁石の名残と思われる石が僅かにあり、3段築成の可能性もある。北側が基底面との比高差が少ないが、この部分の縁石は石の平坦な小口を外側にそろえる配慮がなされている。この墳墓の正面ではないかと考える。規模は、 $4.05 \times 3.77\text{m}$ 、高さは、比高差の最も高い南東側で0.94m、最も低い北西側で0.25mである。上部は $2.78 \times 2.14\text{m}$ の平坦面が方形の縁石により作りだされており、その中央部に主体部縁石を配している。主体部は0.60m四方のもので、深さ約0.5mのものである。中に、焼骨が比較的良い状態で検出された。内部には、炭化物と灰が混入しているが、別の場所で茶毬にふされたものを、埋葬したものと考える。なお、主軸に対する方位はN30°～Wである。

12号墓（付図1、第11図、図版17の4・5） X79216～79220、Y21389～21401に位置する。11号墓の北側にあって、平面形は、梢円に近いが、方形を意識したものとなっている。ほぼ全面に葺石状の石組みが方形に組まれている。規模は全体で、 $3.88 \times 2.89\text{m}$ 、石組み部分で $1.86 \times 1.52\text{m}$ である。主体部は、この石組み部分の中央にある。主体部は方形の堀肩で径約1m、深さ約0.4mのものである。この主体部床に円形の掘り込みがあった。内部から繩文土器が出土しており、12号墓の遺構ではない。出土遺物は、検出されなかったが、規模からみて上葬であったものと考える。なお、主軸に対する方向は、墳頂部でN27°～Wである。

13号墓（付図1、第12図、図版18の1・2） X79214～79218、Y21394～21398に位置する。12号墓南東側、11号墓の南西側にあり、規模は $2.67 \times 2.67\text{m}$ ではほぼ方形で、高さは、0.31mである。墳丘はなだらかで、その中央部に $1.61 \times 1.60\text{m}$ の方形を意識した集石があり主体部となっている。主体部には2つの穴が確認されるが、黒褐色土の入ったものは、繩文時代の土器であると考えられ、茶灰色土の入ったものがこの墓に伴うものと考える。出土遺物はなく埋葬形態は土葬と考えられる。なお、主軸に対する方向は、N27°～Eである。

14号墓（付図1、第14図、図版18の3） X79216～79201、Y21396～21401に位置する。13号墓の北東側に隣接しており、4号墓から18号墓の南側を通って伸びる集石列に北端で接している。平面形は、ほぼ正方形に近い隅丸のものである。規模は、 $3.58 \times 3.09\text{m}$ 、高さは、0.49mである。墳墓の周縁は方形に並べられた縁石により形成されている。この縁石は、2段にわたって整然と並べられており、墳頂部にも一部縁石の名残が確認される。主体部は、2段目の縁石の内側で、 $2.21 \times 2.26\text{m}$ の規模を持つ。深さは、墳頂から約40cmで基底部にはほぼ等しい高さで平坦面が作り出されている。この平坦面を掘り込んで、径約0.7mの土壙が寧たれている。出土遺物はないが、土葬の跡ではないかと考えている。主軸に対する方位は、N30°～Wで、11号墓と同一である。墳形からみても、非常に近い時期に造営されたものと考える。

15号墓（付図1、第17図、図版19の3・4） X79228～79231、Y21398～21401に位置する。調査区北西隅にあるもので、墳丘はなく、方形の集石のみであり、今回調査したものの内、唯一の例である。集石は、 $2.20 \times 2.11\text{m}$ の規模で作られており、平坦面を作り出している。主体部は、特に見当ならない。墓として分類しているが、上部に構造物の建設可能性もある。主軸に対する方位は、N2°～Wで、磁北にほぼ一致する。上部に構造物が建つと考える場合、墓群全体の位置からみて、墳墓堂などの施設とも考えられ、今後十分に検討する必要がある。

16号墓（付図1、第6図、図版19の1・2） X79225～79225、Y21404～21408に位置する。1号墓の北西に隣接して造営されている。平面形は梢円で規模は、 $3.55 \times 2.84\text{m}$ 、高さ 0.56m である。墳丘は墳頂部をほぼ全体に覆うように葺石状の石組みが施されており、石組みの墳丘墓と言える。石組みは、方形を意識しているが、明確ではない。墳丘全体の概ねの主軸方向は、 $\text{N}23^\circ - \text{E}$ で、1号墓に近似している。主体部は、明確ではなく、基底部分からかわらけが、出土している。おそらく、8号墓でみられるものと似た、埋葬方法が用いられているものとみられる。なお、主軸の方向は、8号墓とも近似値である。

17号墓（付図1、第13図、図版18の4） X79221～79224、Y21390～21394に位置する。12号墓の北に位置し、調査区の最西端に造営されている。残りは、あまりよくないが、墳頂部分を方形に覆う形の、墳丘墓と考える。規模は、復元で $2.36 \times 2.16\text{m}$ 、高さ 0.27m である。墳頂部分の石組みは、概ね $1.14 \times 1.08\text{m}$ の規模で、主体部は、確認できなかつたが、墳丘表面で、かわらけが出土している。主軸に対する方向は、 $\text{N}23^\circ - \text{E}$ である。

18号墓（付図1、第15図、図版18の5） X79219～79213、Y21401～21404に位置する。4号墓の西、14号墓の北東にあり、4号墓西から約10mにわたって伸びる石組みの段上に築かれている。平面形は、不整形のものであるが石組みの段を利用した方形に近い台形で、基本的には、土塙墓であると思われる。規模は、 $2.67 \times 2.35\text{m}$ で僅かな高まりがある。中央部に梢円形の $1.03 \times 0.72\text{m}$ 、深さ 0.32m の土塙が穿たれている。出土遺物は、土師器、かわらけが出土している。時期は、遺物から13世紀代から14世紀代のものと考える。主軸に対する方向は $\text{N}40^\circ - \text{W}$ である。

19号墓（付図1、第16図、図版19の5） X79212～79216、Y21398～21402に位置する。9号墓の北側、7号墓の南西側部分に造営されている。平面形は、隅丸の長方形で、墳丘・石組みなどの施設のない土塙墓である。規模は、 $3.57 \times 2.78\text{m}$ で僅かな高まりがある。ほぼ中央に径約 1.2m 、深さ、約 0.3m で土塙が穿たれている。出土遺物は確認されなかったがおそらく土塙墓と考えられる。主軸に対する方向は $\text{N}37^\circ - \text{W}$ である。

その他の遺構（付図1、図版12の2） その他の遺構には、縄文時代のものと考えられる穴12と、溝1条がある。穴は、径 30cm から 1m 程度まで様々であるが、墓群を構築する際にかなり削られているようで堀肩のしっかりしたものはない。溝SD01は、縄文時代の遺構の中で最も残りがよい。長さ約 13m 、幅約 1m で、発掘区の北西にあって東から西にほぼ等高線上に走っている。しかしながら、他の遺構が明確ではなく、出土遺物も少ないためどういう意味があるのかは、判然としない。

注（1）京田良志氏の御教示による。

2. 遺物（図版2～8・21～26）

出土遺物は、縄文土器・石器、珠洲焼の壺・擂鉢・鉢（藏骨器）、土師質の皿（かわらけ）、五輪塔などが出土した。縄文時代の土器・石器は、造墓のため遺構の大部分が失われており、元位置は明確ではないが、珠洲焼、土師質土器はいずれも、墳墓に伴う出土品であり、残存状況も比較的よいものばかりである。以下図版ごとにその特徴を述べる。

珠洲焼（図版2～4・21・22・24） 図版2の遺物はいずれも2号墓から出土した珠洲焼の藏骨器である。1は、上胴部が膨らんだ形の壺で、いわゆる壺R種C類に分類されるものである。一部破損した部分もあったが、ほぼ完形で出土した。口径 10.4cm 、器高 22.4cm 、胴径 19.4cm 、底部径 8.6cm のものである。上胴から中胴部にかけて波長のみだれた、やや振幅の大きい櫛目波状文を三带施文する。頸部に、径約 1cm の竹管文が2個一対みられる。一つはしっかりと押圧してあるが、一方の押圧痕は、かなりあまい。頸部は、丸みをもちながら外反するが、この口縁端部でやや内湾し、丸みをもった口縁を印象付けている。黄灰色の肌をなし、焼きは、ややあまい。内外面に櫛縫整形された痕跡が残り、また外底面に静止糸切り痕をとどめている。珠洲焼の編年の中期ないしⅢ期のものと考えた。2は、片口の鉢である。口径 23.5cm 、器高 6.3cm 、底部径 10.0cm のものである。全体の80%程が残っており、1の壺の傍らで出土しており、1の蓋であると考える。灰白色の器面をもち、胎土も緻密ではあるが、焼ひずみの大きい粗製のものである。

器体がいくぶん膨らみをもち立ち上がり、口縁端部は、先端を肉薄に挽き出し外端でしっかり面を取った形のものである。底部には、静止糸切り痕がみられる。また、外底部がいくぶんすり減っており、転用したものと考える。注口部は、嘴状にちょこんと突出しているだけの簡単な作りである。珠洲焼の編年のⅢ期にあたるものと考える。

3は、2の北側横で出土した。埋められていた穴には、扁平な石が敷いてあり、底部が破損しており、納められていたであろう人骨は、失われている。しかし、ほぼ全体が残っており、良好な資料である。全体は、灰白色ないしは、灰色を呈し、口径14.6cm、器高32.4cm、胴径25.7cm、底部径9.6cmで、頸部径13.4cmのものである。器形は、撫で肩ぎみの長卵形の体部を、条線状原体を用いた、やや乱れ気味の櫛目波状叩打で飾る。端部を嘴状に仕上げた口縁に櫛目波状文がめぐり、頸部にやや幅の広い櫛目波状文がめぐっている。内面に、当具痕が整然と残る。胎土は緻密であるが、焼きのせいか、器面全体の印象は緻密とは言い難い。珠洲焼の編年のⅡ期あるいはⅢ期のもので、鎌倉中・後期のものと考える。4は、3の壺に蓋として被っていた片口の鉢である。口径20.4cm、器高8.4cm、底部径8.8cmのこぶりのもので内面にオロシ目はない。全体に灰白色を呈するが、底部は、淡橙色で、やや焼きがあまい。底部から口縁端部にかけてやや内湾しつつ立ち上がり、口縁端部は丸みを帯びているものの、面を取る意識が感じられる。静止糸切り痕が外底面に残るが、撫でにより消されている。底面は、やや擦り切れており、使用痕と考えられ、これもまた、転用品である。珠洲焼の編年のⅡ期あるいはⅢ期のもので、鎌倉中・後期のものと考える。

5は、今回出土した藏骨器の中で最も大型のものである。6の擂鉢が蓋として被さる。内部に、焼骨が全体の1/3の量が納められている。口径19.7cm、器高33.8cm、胴径33.2cm、底部径10.9cmのものである。やや肩のはつた倒卵形の器体に広口の口縁を付けた壺である。完全な形で出土した良品で、胎土は、緻密で、焼成も良好なものである。器面底部を除いてほぼ全面に右下がりの叩き目が施されている。叩き目は、溝の深い条線状の原体を強く叩き締めて付けられている。内面には、全体の1/3まで当具痕が見られ、内底面は、甕轆ナテ痕が残っている。器面全体は、灰色または、灰褐色を呈している。外底面に、静止糸切り痕を残すが、すり消された痕跡も残る。頸部は、外反して立ち上がり、口縁部は、面をもって、やや丸くひらく。珠洲焼の編年のⅢ期のものと考える。6は、口径34.0cm、器高15.0cm、底部径12.4cmの片口の鉢である。こんもり膨らみをもって立ち上がる珠洲Ⅰ期の霧團氣を残しつつ、直線的に立ち上がる器体をもち、口縁外端でしっかり面を取っている。注口は、口縁の外周線よりやや下がりぎみであるがコの字状に丁寧に作られている。内面には、櫛歯具を使用して、直線的叩目を6条かけ合わせて施す。肌は、緻密で灰褐色を呈する。珠洲焼の編年のⅡ期までさかのほるものかもしれない。

図版3の1・2、5は、それぞれ2-2・2-1号墓から出土した遺物である。1は、片口の鉢である。体部が直線的に立ち上がり、口縁外端部に、面を作りだすものである。内面に卸し目のないもので、外底面に静止糸切り痕を残すものである。全体の半分が失われているが、断面に漆が残っており、破損したものを修理して使用したものと考えられる。口径20.8cm、器高7.9cm、底部径10.0cmを測る。2は、2-2号墓主体部から出土した。全体の約80%を残している。内部に少量の焼骨が納められていた。口径9.7cm、器高18.7cm、胴径17.3cm、底部径8.6cmの小型の壺である。器形は、口縁が外反し、怒り肩のまま底部にすほまる器体上胴、中胴、底部にやや浅い櫛歯具による、櫛目波状文が3列ゆるやかに流れている。口縁は、櫛轆により引き上げられ、端部をまるく納めている。内面上胴部に段がついており、口縁部との接合痕と考える。内面は底部に明瞭なミズビキ線がみられる。1・2とも珠洲焼の編年のⅢ期のものと考える。5は、2-1号墓上面で検出された。壺T種の上胴部の破片で、頸部付近にやや細かな振幅の櫛目波状文が走り、胴部に並行な2列の櫛目条線が走っている。

3は、3-1号墓主体部から出土した藏骨器で、内部に焼骨が僅かに納められていた。他の藏骨器と異なり、蓋は扁平な石であった。口径10.0cm、器高20.1cm、胴径16.3cm、底部径7.6cmの小型の壺である。器形は、口頸が力強く外反し、口縁端部が、嘴状にとがる。こんもりと膨らんだ上胴に、やや緩の浅い櫛目波状文が薄く不規則に二番めぐる。

また、上崩には、降灰による釉が見られる。やや歪みがある粗製のものだが、焼成は、堅敏である。珠洲焼の編年のⅢ期に比定されるものと考える。4は、6号墓の石組み内から検出された。こんもりと膨らみをもって開く器體が内湾ぎみにおさまり、外端でしっかりと面を取っている。内面に卸し目はなく、珠洲の編年のⅡ期の特徴を備えるものである。注口はU字状のもので丁寧な作りとは言い難い。口径約19.5cmの小品である。6・8は、1号墓周溝内から検出された。いずれも壺の胴部の破片である。6は、器面全体に叩き目がみられ降灰による釉がみられる。灰褐色を呈するやや大きめのものである。8は、底部近くの破片で、胎土はやや粗く、焼成はよくない。7は、壺の口縁で2-2号墓の埴丘上で検出された。口径約11cmのものである。

図版4の1~5は、3号墓・2号墓などに散乱しているが同一の個体と考える。破片断面で見る胎土は、黄灰色を呈し、焼成があまいせいか、気泡が入っている。1は、壺の口縁の破片である。外端面が外反し、口縁全体を水平に作りだしている。2~5は、胴部の破片である。浅い条線状原体を用いた、被杉状叩打で飾る。6・14は、9号墓埴丘上で検出した。2~5に比べやや深い条線状原体を用いた、被杉状叩打で加飾されている。7は、鉢である。底面から直線的に立ち上がるものと見られる。外底面に静止糸切り痕が見られる。8は、15号墓埴丘上で出土した。まるく膨らむ体部をもち幅の狭い卸し目が見られる。9・10は3号墓主体部付近で出土した。9は、口径35.4cm、器高14.0cm、底部径10.6cmの片口の鉢である。灰色ないしは灰褐色を呈し、焼きはややあまい印象を与える。器形は、内湾しつ立ち上がる器体の口縁を爪状にシャープに仕上げ、注口をしっかりと作りだしている。内面に見られる卸し目は8条あるが、幅が狭く、浅い印象がある。一部擦り切れており、使用痕と考える。また、内面には、武田菱に似た刻印が3個付けられており、特徴的である。外底面には、静止糸切り痕が見られる。珠洲の編年のⅡ期に比定されるものと考える。10は、珠洲の壺ないし壺の破片である。12は、6号墓埴丘掘から出土した。壺の口縁でやや外反しており、端部外面が外へ張り出している。Ⅲ期のものかもしれない。

11・13・15は、今回の調査区内で発見された遺物の内早い段階のものでおそらく墓群が形成される以前のものと見られ、本遺跡の成立上注目されるものである。13は、7号墓埴丘掘で探集された。須恵器の壺で断面に見る胎土は、橙色を呈する。内面に、ミズビキ線がみられる。11・15は、土師器の壺の破片である。黄橙色を呈し、外面に叩きによる調整、内面に同心円状の当具痕が見られる。15は、丸い底部の壺である。

土師質土器（図版5・23・24） 図版5は、土師質の皿（かわらけ）を中心で示した。これらの遺物は、いずれも遺構に伴うもので、本墓群の造営時期を、考える上で手がかりとなる資料である。

1~3は、1号墓の周溝から出土した。口径は、いずれも10cmのもので、器高は、2cm程度の薄いものである。ナデによる整形で、2・3に明確ではないが器體に段が見られる。端部は、丸く納めるものであるが、2は、やや外反する。4は、2-2号墓で出土している。底面が平坦で口縁部への立ち上がりが小さく、浅手である。口径は、約9cmである。5は、3号墓から出土した。小片で復元はできないが、口縁が大きく外反するものである。6・7は、4号墓掘で出土している。墓に伴うものとは考えられない。6は、壺の口縁で、やや肥厚するものである。内外面が赤彩されている。7は、碗もしくは、鉢の底部である。外底面にリング状の静止糸切り痕が残る。8~10は、5号墓主体部から出土した。8は、低い柱状高台をもつ皿である。底面からの立ち上がりは、浅く、径6cm程度の小さいものである。9は、口径約8cmで器高2cm程度のものである。非クロコ調整で、口縁部にかけて面取りが行なわれている。口縁端部は、丸くつまみあげて整形されている。10は、口径約10cmで器高約2cmの皿である。器壁がやや厚く口縁は、丸い。

11~18は、6号墓より出土した。16は、埴丘上で出土しているが、他のものは、第2主体部内から出土しており、埋葬の際の副葬品と考えられる。いずれも皿で、出土枚数は、7枚である。口径は、11~14がほぼ8cm前後、15が10cm、17が13.5cmである。調整は、ロクロコ調整は見られず、いずれも手すくねである。11などには、器面に段がついており、二段なで風の意識はあるが、全体としては、口縁端部に面取りを施す。口径の最も大きい17は、口縁端部をつまみあ

げて、やや内湾させている。12~13世紀のものと考える。

P 19・20は、7号墓から出土している。口径10cm程度で口縁端部に面取りを施している。

P 21~28は、8号墓から一括して出土した。墳丘墓底面にうつ伏せに折り重なるように出土したものである。埋葬の際に行なわれた祭祀を示すものなのか、ほとんどの個体に、スヌが付着している。口径は、約8cmのものが、7枚に、約15cmが1枚で構成されている。ロクロによる調整のものではなく、口縁端部に面取りを施したものである。どの個体にも、外底面に窪みが施されている。13世紀前半の特徴のものと考える。

P 29~34は、15号墓から17号墓の墳丘上あるいは、裾から出土したものである。器面に段を残す31・33なども含めて、口縁端部に面取りが施されるもので、13世紀前半に主体のある遺物が多い。35・36は、18号墓の土壙内から出土した。ロクロ整形による小型の鉢で10世紀代のものと考える。遺跡全体に言えることであるが、これらのやや古い時期の遺物は、墳墓が形成される以前に何らかの施設があったことを示すものと考えられ、今後周辺の調査でそれも明らかにしていきたいと考える。

その他の遺物（図版6~8・25・26） その他の遺物としては、縄文時代の土器と石器が出土している。本遺跡は、舌状の丘陵上に立地していた縄文時代の遺跡を削平して造営されている。そのため、縄文時代の遺物は、墳丘内部など、遺構外からの出土がほとんどである。遺構に伴うものとしては、調査区の北西部で検出された溝・ピットからの出土があるが、良好な状態で検出した遺物は、少ない。年代的には中期初頭のものがほとんどである。

縄文土器 S D 01（図版6の1、図版25） 図版6の1は、やや外反する平縁の口縁に半円形の突起を付け、頸部外面の届曲部分を指でなでる。口縁部は、無文であるが、胴部には、縄文が施される。焼成は、良好であり、胎土に砂粒を多く含む。中期初頭、新保・新崎式期に比定されると考える。

P 5（図版6の6、図版25） 図版6の6は口縁がキャリバー状を呈し、口縁端部外面に、箇状工具によるものと思われる横位沈線を施す。口縁部内面は丁寧になでられ、口唇部に面を見る。外面に粒の大きいLR縄文を施し、煤が付着する。焼成は、良好であり、胎土に砂粒を含む。中期初頭に比定した。

P 8（図版6の4・5、図版25） 図版6の4は、粗製の深鉢である。外面全体にLR縄文を施し、煤が付着する。焼成は、良好であり、胎土は、緻密である。5は、外面に斜格子目文を施し横位並行の半隆起線で区切る文様構成をとる。色刷が赤褐色を呈し、胎土に雲母・石英を含む。焼成は良好である。中期初頭、新保式に比定できる。

P 12（図版6の2・3、図版25） 図版6の2は、キャリバー状になる口縁部付近の破片である。外面を細かいRL縄文で施し、その上から赤彩する。焼成は良好であり、胎土に石英・長石を含む。3は、底部の破片である。縦位半隆起線を施し、その間にLR縄文を施す。色刷は赤褐色を呈し、焼成はやや悪い。新保式から新崎式期に比定される。

遺構外出土遺物（図版6の7~20、図版7・25・26） 以下は、遺構に伴わない土器である。図版6の7は、斜格子目文を施し、横位半隆起線で区切る文様構成をとる。焼成は良好である。胎土は密であり、長石・雲母を含む。8は、キャリバー状になる口縁をもち、横位並行の半隆起線で格子目文を区切る文様構成をとる。胎土に炭を含み黒色を呈する。9は、方向の違う斜行並行の沈線を組合せて器面を埋め、横位の半隆起線で区切る文様構成をとる。10は、撚糸文を地文とし細かい並行の半隆起線を縱横に組合わせる。撚糸文の一部は、指で磨り消され、縦位の半隆起線間に無文となる部分がある。焼成は良好で、胎土に長石などの砂粒を含む。11~20は、やや崩れた木目状撚糸文を施すものである。ほとんどの個体の胎土は緻密であり、焼成は良好である。以上7~20は、中期初頭の新保式に比定される。

図版7の1・2は羽状縄文を地文とし、1は横位に、2は縦位に施文される。1はやや内湾する口縁部であり、赤褐色を呈する。1・2とも焼成は良好であり、胎土は密である。3・5は、1はやや内湾する口縁部であり、赤褐色を呈する。1・2とも焼成は良好であり、胎土は密である。3・5はいずれも口縁部であり、横位並行の半隆起線で器面を埋める。

3は、肥厚した口縁部に半截竹管により爪形文を施し、以下この半隆起線一つおきに繰り返される。また、内面を横方向に丁寧に磨いている。5は、三段目が爪形文になり、その上の半隆起線に連続して刺突を施す。3・5とも焼成は良好で、胎土は密であるが、大粒の砂粒を含む。新保式～新崎式期と考える。4は、B字状区画を施しする胴部の破片である。半隆起線での区画を横位沈線で埋める。焼成は良好で、長石などの砂粒を含む。新崎式に比定されよう。6は、底部近くの破片である。縦位の半隆起線を密に配置しその空間に連続して刺突を施す。焼成は、良好であり、胎土は密で赤褐色を呈する。7は、肥厚した口縁部上端に円形の貼り付けを施し、外間に半隆起線で二重の区画を施文する。外側の区画には、半截竹管による爪形文を施す。やや短めのキャリバー状口縁になるとと思われる。焼成は良好であり、胎土は密で黄橙色を呈する。中期初頭、新崎式期の新しい段階のものと考える。8・9は撚糸文をもつ粗製の深鉢の口縁である。8は、口縁部をやや肥厚させ、上端に面をとる。9は、やや外傾する口縁部上端外面に2条の並行沈線を施す。8・9ともに焼成は良好であり、胎土はやや疎で大量の砂粒を含む。14は、キャリバー状になる口縁の頸部破片で、地文が無文である。下端部に1条の沈線を施文する。焼成は良好であり、胎土は密でやや淡い赤褐色を呈する。10～13、15～22は、斜繩文を地文とするものである。10は、やや肥厚する口縁部の破片であり、屈曲部内面を指でなでる。11は上端外面に2条の並行沈線をもつ。おそらく口縁部付近の破片であろう。その他はほとんどが胴部の破片で、R L・L R両方の撚りの繩文がある。胎土はやや疎のものが多く、長石・石英・雲母などを含む。焼成は概して良好なものが多い。

以上のように、本遺跡の繩文土器は、中期初頭のものによって占められており、この地に短期間営まれた縄文集落があったものと考えられる。

石器（図版8・26）

打製石斧（図版8の1・2、図版26） 1は、平面形が短冊形を呈し、扁平な粘板岩を石材とする。基部側面を敲打して、抉り部を作りだす。2は、棒状に近い形状である。基部側面を敲打するが、抉り部はない。

磨石（図版8の3、図版26） 3は、断面形が梢円を呈する細長いものである。両側面に節理面をもつ。ほぼ全面に擦痕を残す。石材は、凝灰岩である。

磨製石斧（図版8の4、図版26） 4は、平面形が短冊形を呈するが刃部に向かってすぼまる。未製品で、全面に研磨痕が残っている。石材は、蛇紋岩である。

(2) 黒川塚跡東遺跡の調査

上山古墓群の北東約50mに谷をはさんで、東西約80m、南北約70mの平坦面が広がっている。標高68mから75mのこの地域は、当初道路の工事計画のなかった部分ではあったが、上山古墓群が全面保存されるにあたって、道路の方線変更が必要であったため、急遽、試掘調査を行った。現況は、杉の植林が行われているが、それ以前は、畑地として利用されており、その痕跡がこの平坦面全体に残っている。調査によって発見された遺構は、墳丘墓が4基で、畑地として利用されていた時代から、塚として削平されることなく残ったものである。平坦面では、遺構は今回の調査では、確認されないが、全体に須恵器などの破片が採集され、ここに遺跡のあることを暗示している。道路方線は、この平坦面を残す形で迂回して計画されることになり、この地区についてもほぼ全面的に保存されることとなった。

1. 遺構（第18図、図版20） 検出した遺構は、墳丘墓が4基である（1～4号墓）。標高70m～72mのやや傾斜した地域にあり、1号墓がやや離れて築かれているが、2～4号墓は、西から東に隣り合って築かれている。

1号墓（第20図、図版20の1） この平坦面を南西から北東に伸びる山道の傍ら、標高70mの等高線に沿って築かれている。平面形は、隅丸の長方形で規模は、約5m×3m、高さ約0.5mのものである。上部は約4m×3mの平坦面があり、西側に入頭大から約0.5mの石を5個集めた集石がみられる。付近から須恵器片が採取された。

2号墓（第20図、図版20の2） 1号墓の北東約15mに位置する。平面形は楕円で規模は、約6m×3m、高さ約0.6mのものである。盛土されたマウンド上に、約0.5mの石が2個のっており、集石の跡と考えられる。また、朽ちた桟の木の切り株があり、墳頂部はやや荒れた感がある。周辺から須恵器片が採取した。

3号墓（第20図、図版20の3） 2号墓の東に隣接して構築されている。平面形は円形で直径約2m、高さ約0.3mの墳丘墓である。集石の痕跡はなく、平坦面も観察されない。

4号墓（第20図） 2号墓の北西に隣接して構築されている。平面形は円形で直径約2m、高さ約0.3mの墳丘墓で3号墓とはほぼ同様の作りである。周辺に須恵器片を採集しているが、墳墓に伴うかどうかは判然としない。

2. 遺物（図版9・10、図版27） 遺物は、この平坦面全体で、採集されるが、南側の崖際の部分では、ほとんど採集されない。また、出土遺物の多くは、須恵器で、検出した墳丘墓に伴うものかどうかも、判然としない。しかしながらこの平坦面に、上山古墓群が築かれる以前になんらかの施設があったことが考えられ、この地域全体の古代から中世に至る変遷を知る上で重要なものと考える。

図版9の1～18は、須恵器である。1は、碗の高台、2は、壺の頸部である。いずれも小片であるが、1の高台などから11世紀代のものと考える。3～14・17・18は、甕、壺類の腹部の破片である。内外面に叩目と当具痕をのこしている。叩目原体は叩目と直行ないし斜行して刻み目を入れる平行叩目が目立ち、内面の押圧痕はやや小さめの同心円形のものがみられる。10～11世紀代の遺物と考える。15・16は、底部の破片である。16は、外底面に静止糸切り痕を残している。19～21は、縄文土器・石器である。19は、深鉢の破片である。半隆起線で区画された中に縦位沈線を配して紋様を構成している。20は、バチ型の打製石斧である。刃部に使用痕をとどめる安山岩を石材としている。21は、無茎の石族である。細かな剥離が行われた良品である。石材は、安山岩を使用している。

図版10は、墳丘上ないしは、その周辺で出土した遺物である。1～4は、1号墓墳丘上集石周辺の遺物である。同一の個体と考えられ、内外面に叩目・当具痕がみられる。叩目原体は叩目と斜行して刻み目を入れる平行叩目が、内面の押圧痕はやや小さめの同心円形のものがみられる。5・6は、2号墓墳丘上で採集した。外底部の叩きは、平行叩きである。7は、4号墓墳丘上で採集した。1～4と同様の特徴をもつ。9は、壺の口縁部である。口縁が外反し、灰褐色を呈するものである。口縁端部が水平で沈線状のくびれがみられる。これらもやはり、10世紀から11世紀のものと考ええる。

(3) 調査の成果の整理

今回の調査で確認された墓は、22基であるが、墓群全体では、まだ未調査のものが19基以上存在し、都合40基以上の墓が群をなして存在することになる。全体像については今後順次調査して行く中で明らかにして行きたいが、現段階で調査の成果を整理し、まとめておきたいと思う。

1. 墓の分類

墓域を構成する墓の形態は、全体の調査が終了していない段階では、その実態を測りかねる部分もあるが、おおむね墳丘をもつものと、いわゆる土壙墓といわれるもの、単に集石だけのものに大きく大別できる。その内圧倒的に多數を占めるものは、墳丘をもつもので、19基がこれにあたり、土壙墓が2基、集石が1基であった。未調査部分についても墳丘をもつものが地形的にみても圧倒的に多く、僅かに残された平坦部に土壙墓が存在すると仮定してもこの傾向が大きく変わることはない。この種の墓群の報告例は、近年の発掘調査件数の増加とともに分析が行われている。特に、昭和59年から63年にわたる、静岡県磐田市の「一ノ谷中世墳墓群」の調査では、12世紀から13世紀に亘る、161基の墳丘をもつ墓の報告がなされており、群集するものの代表的な例と言える。ここでは、「塚墓」と呼んでいるが本遺跡で言う墳丘墓にあたる。北陸でも、石川県鹿島郡の上町マンダラ遺跡、松任市の劍崎遺跡、能美郡辰口町の湯屋チョウヅカ遺跡、新潟県北蒲原郡能郷村の華報寺中世墳墓群などが知られている他、富山県内においても福光町医王山山岳信仰遺跡群の若宮遺跡・香城寺惣堂遺跡、井口村寺山中世墳墓群のほか未調査ではあるが、富山市杉谷群集塚などが知られている。これらの調査成果を踏まえ、本遺跡の墳丘墓を分類することとした。

墳丘墓の分類について

本遺跡で云う墳丘墓は、土をもりあげて作ったいわゆる土饅頭タイプの墓である。これらは、墳頂部に集石するもの、全体に葺き石状に石で覆うもの、周囲を線石で囲むものなどがあるが、基本的に、土を盛り上げて造っていること。周囲に溝、または削りだし等によって区画するもの二つの要素がある。墳丘墓の分類については、「剣崎遺跡」・「一ノ谷中世墳墓群」での成果があるが、その分類基準は、いずれも火葬か否かを前提にして4類あるいは、7類に分類している。本遺跡の場合もほぼこれが当てはまるものと考えるが、この類例がないものもあり次の様に分類した。

- A 類 遺体を土坑に単数埋葬したもの。
- B 類 火葬骨を、小型の土坑や、円形の小穴をほり、その中に埋葬している。中には、木箱などに入れて埋葬した可能性もある。
- B' 類 火葬骨を複数の土坑に埋葬したもの。埋葬方法は、B類と同じである。
- C 類 火葬骨を、珠洲焼の蓋骨器に入れ、埋葬するもの。
- D 類 火葬骨を、その灰とともに墳丘の基底面におき、盛土をして埋葬したものです。火葬跡は、検出されない。
- E 類 埋葬や火葬の跡がまったくみられない。

また、これらは、墳丘の形状の違いから、a. 方形（不整形を含む）b. 長方形（不整長方形を含む）c. 円形（椭円形を含む）d. その他、不整形でどれにも属し難いもの、あるいは不明のものの4種類に分けることができる。方形と、長方形の違いは、見た目で方形のものととらえられる許容範囲であり、タテとヨコの比率が1:1.5以下のものと規定する。

「一ノ谷中世墳墓群」で行った分類に準じて、AからD類と、aからdを組合せ、方形の墳丘で、土坑を主体部とするものをA a類とし、以下それぞれを組合せて分類すると第1表のようになる。

第1表 墳丘墓の形態別比較

	A類	B類	B'類	C類	D類	E類	計
a類	4	5	1	2	1		13
b類			1				1
c類	1				2		3
d類		1				1	2
計	5	6	2	2	3	1	19
葬法	土葬		火葬	墓		不明	

以上から、本遺跡では方形の火葬墓が多く、なかでも火葬骨をそのまま土坑に埋葬するものが多い傾向にあることが分る。これは、「一ノ谷中古墳墓群」で一般的にみられる土葬の形態とは明らかに異なる傾向である。

墳丘墓を構成する諸要素

前述の分類は、葬法と墳丘墓の形状のみを組合せた分類であるが、墓を構成する要素は、このほかに、盛土、周溝、石組み（葺き石を含む）などがあり、さらに墓の拡張や、追葬、副随品などの要素が組みあわされて、現在の墓群の景観を作りだしている。しかしながらこれらの要素を分類の中に組入れると、複雑になり、收拾がつかなくなるので、今回は、これらの要素を列記するに止めた。

（1）盛土

全ての墳丘墓に共通する要素の一つである。高いのは、1号墓の1.05m、9号墓の1.69mの高さを確認できる。中には、動物などの擾乱により、0.1m程度の高まりしか残さないものもあるが、大部分は、0.3~0.6m程度の高さを確認できる。埋葬は、盛土が行われた後に土坑などを穿ち行われるもの（B・B'類）と、火葬骨を、その灰とともに墳丘の基底面におき、盛土をして埋葬したもの（D類）がある。2号墓の葬骨器埋葬部分や、2~2号墓、3~1号墓は、もともとあった墳丘や盛土を利用して築造されており他の墳丘墓とは異なった感があるが、盛土の高まりを意識していたことは間違いないところと考える。

（2）周溝

周溝が巡るものは、1号墓と9号墓のみで、必ずしも墳丘墓全体の特徴とは言い難い。5号墓の東側と、6号墓の南側に溝がみられるが、墓全体に巡るものではない。1号墓の周溝は、全体を巡るものではないが、2~4号墓築造の際に、埋められた可能性が高く、全体に方形を呈するものと思われる。9号墓は北側に周溝が巡り、北側の墓群と境界を画するように配されている。完全に周囲を巡るものではなく、全体の半分を巡るにすぎないが、南側半分は、約1mの段があり、その部分で溝が途絶えている。この2つの墓は、今回調査した中で最も大きな墳丘をもつもので、墓群全体の中でも中核的なものと考えられ、被葬者の階層ないし地位などが、高い可能性を示し、墓群を一定程度ブロック別のまとまりととらえる際のキーポイントになるものと考える。

（3）集石・石組み

墳丘墓の内、1・7号墓を除く16基になんらかの石組み、集石が行われている。石組みには、3つのタイプがある。これを列記すると、

ア類 墳頂部に方形ないし方形を意識した集石、縁石を設けるもの（2・2-2・5・8・9・12・13・17）

イ類 基底部に墳形に対応する方形の縁石を施したもの（2-1・3-1・4・10）

ウ類 墳丘全体に縁石、葺き石などを施したもの（2・3・6・11・14・16）

などがある。この内2号墓は、2段の平坦部があり、墳頂の平坦部がア類、2段目の平坦部がウ類、の形式がとられており、後述する拡張によるものとみられ、両タイプが併存している。これらの集石や石組みの変化は、これらの墳丘墓からの出土遺物、墳丘の切り合いなどからみて、ア類が13世紀前半、イ・ウ類が13世紀後半におおむね比定されるものと考えており、さらに1・7号墓など明確な石組みをもたないものはさらに古い傾向のものではないかと推定したい。

集石・石組みには、墓群を区画するための段状遺構に伴うものもある。4号墓南西隅から14号墓西まで続くものでこれより北では15号墓（石組み遺構）16号墓、18号墓（上塙墓）がみられるだけで墓の数は極端に少ない。墓群全体の中はどういう意味をもつものかは不明である。

（4）副葬品

出土した副葬品は、いずれも土師質の皿（かわらけ）で、その他のものは出土していない。10基の墳丘墓から出土したが形態別に出土した墳墓をみると、B・B'・C類でいずれも火葬墓である。埋葬の際の葬送儀礼に伴う遺物と考えられ、火葬との関係があるようである。特に、8号墓にみられる8枚の土師質の皿がうつ伏せに重なって出土した例は、特徴的である。

（5）墓の拡張

墓の拡張と云ったが、正確には、作り替え、ないし、作り付けたと云った方が適切かもしれない。そうした例は、2号墓とその周辺でみられる。その概略は、

2号墓 方形の墳丘を築き、方形の石組み内に主体部を作る（第一段階）。方形の墳丘を大きく拡大させ、2段に築造し平坦面に敷石し歳骨器による埋葬を行う。この埋葬は、3ヶ所設けられ五輪塔が1基掘えられている。また、南側に祭壇状の敷石を施す（第二段階）。東側に墳丘を張り出して2-1号墓を作り付け基底部に縁石を施す（第三段階）。

3-1号墓 2号墓の第二段階もしくは、第三段階で3号墓が造営されその後、2号墓との間の平坦部に縁石を方形に組み、歳骨器による埋葬を行う。

こうした拡張の例は、歳骨器による埋葬が伴っており、確認はできていないが、3号墓も同様の経過をへて作られた可能性がある。拡張の例は、一ノ谷中世墳墓群のほか、鳥取県東伯郡の斐波古墓で確認されており、13~14世紀代と16世紀から17・18世紀までと時代にかなりの差こそあれ、墳丘墓の拡張が個人墓から集団墓へと変化して行く過程の中で行われたと考えられている。本遺跡の場合、最終段階で行われる埋葬は珠洲焼を歳骨器として行われたもので、2号墓の場合、13世紀後半に比定される。歳骨器が転用されたことを加味しても13世紀末から14世紀にかけてと推定されるが、ほぼ同様の結論が導きだされるものと考える。

2. 土塙墓について

土塙墓と考えられるものは、18・19号墓の2基のみである。前述したように、墓群全体をみた場合でもこの数が飛躍的に増加する可能性は極めて低い。もし土塙墓があるとすれば他の地区で営まれているものと考えるが、本墓群の周辺には、それに適した平坦面・テラスなどは、今の所確認できない。

18・19号墓の平面形は、それぞれ不整形方形、方形で盛土とは言い難い僅かな高まりがあり、そのほぼ中央に円形の穴が空たれている。主軸に併する方位は、N40°～W、N37°～Wと近似値を示しており同一性を感じる。ただ19号墓は配石がまったく行われていないのに対して、18号墓は、一部に方形の縁石が施された痕跡を残している。出土遺物は、18号墓で11世紀代の土師器片を出土したが、埋土内のもので、造営時に意識的に埋められたものかどうか判断し難い。上塙墓が作られている部分は、18号墓が4号墓の西側で、段状の石列に接するように染かれている。19号墓

は、7・9・13・14号墓に囲まれた平坦面を利用して築かれており、墳丘墓の造営の跡に残った部分を利用している感が強く、やや後出的なものかもしれない。

3. 集石について

今回調査した中で唯一、盛土がなく方形の集石だけが残っていた例に、15号墓がある。造営されている部分は、調査区の北西隅他の墓とは隔離してボツンと立地している。墓として取り扱っているが、緻密に敷石されているだけで、主体部などは確認できなかった。規模は、 $2.20 \times 2.11m$ では正方形に近く、主軸に対する方位は、N 2° - Wでほとんど磁北に向いている。上部に小規模の建物が建つ可能性も十分あり、墳墓堂などになるものかもしれない。出土遺物は、集石内から土師質の壺の破片を1点出土するのみである。

4. 群構成について

墓が群集して墓群を形成される場合、その墓の分布、主軸の方向性などからいくつかの群に区分できることがある。これらは、墓の造営年代の時期差としてとらえられたり被葬者の属する集団のまとまりを示すものとしてとらえられたりする。本遺跡の場合もこうした群が読み取れるようである。ただ、墓群全体の調査が終了していない段階で、群構成を論ずるのはやや早計の感もあるが、主軸の方向などからみて群として区分できるものがみられるので、墓の築造順を含めて予見を含めて若干まとめておきたい。

墓の主軸は、基本的には、墳丘の裾（下端）をとらえて同一の方向を向くものを群とした。ただし、墳頂に方形の石組みがみられるものについては、その石組みの方向をとらえて考えたものがある（5・8・9・16号墓）。これらは、墓の拡張など、追葬に関わるような遺構が見出せないもので、墳墓の方向に対する意識が主体部に有るととらえたものである。この方法で群を分けると次の通りとなる。

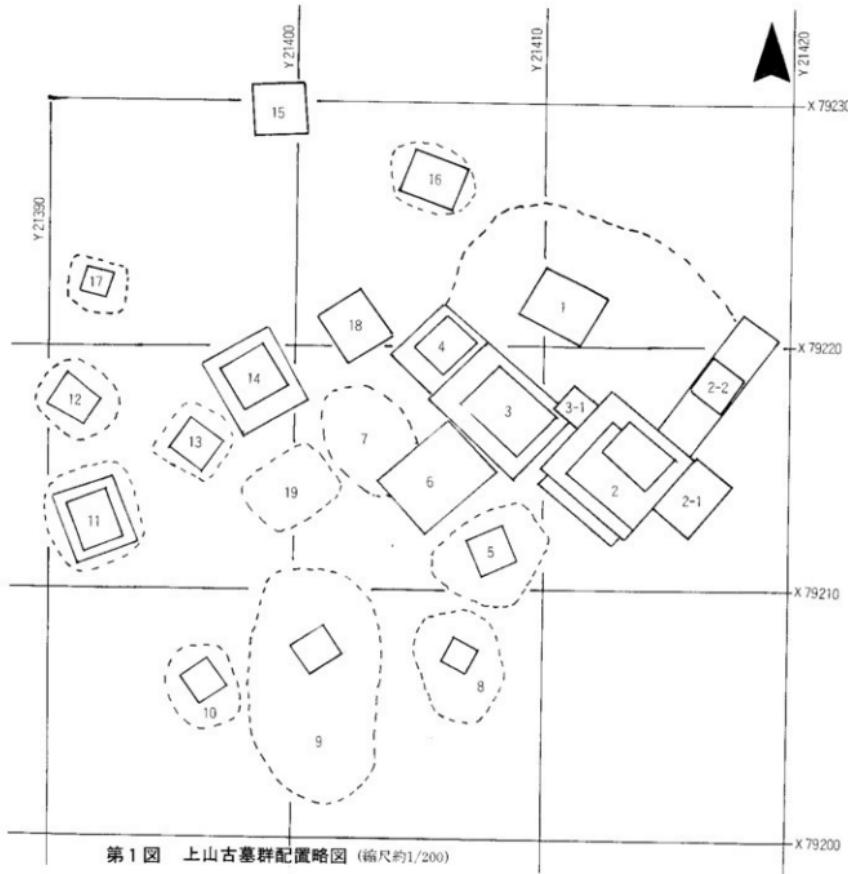
- I 群 1・8・16・17号墓
- II 群 2・2-1・2-2・3・4号墓、（3-1号墓）
- III 群 5・6・7号墓
- IV 群 11・14号墓
- V 群 12・13号墓
- VI 群 9・10号墓
- VII 群 18・19号墓（土塙墓）

この内、3-1号墓は、II群に作り付けられたものとして同一の群にまとめた。また、III群は、必ずしも軸が一定ではないが、6・7号墓がほぼ直交し、5号墓も列としてのまとまりが有るものととらえ同一の群とした。

I群は、一見地域的に相関関係をもたないようであるが、軸方向と、埋葬の方法などで類似性を見出した。いずれも火葬墓である。1号墓が本墓群の中で最も早い段階での築造と考えられることから、この群が本墓群の始まりを示すものと考えられ、その時期は、8・16・17などで出土した土師質の壺から12世紀から13世紀前半と考えられる。

II群は、1号墓との切り合いからI群の後に続く時期である。ただ、2号墓周辺でみられる拡張などから当初あった墓の形態が変質しており、他の群からみるとやや後出的な印象を与える。珠洲焼の壺、片口の鉢などを使用した藏骨器による埋葬が目立ち、13世紀後半から14世紀代の構築が最終的に認められる。1号墓の周溝を一部埋め戻して構築されている点なども考慮すると、今回の調査区の中では一番最後に造営されたものとみたい。また、同一の墓群にいくつかの主体部を設ける点から同族ないしは、家族墓的なものと考える。

III群は、7・5号墓の後に6号墓が築かれている。6号墓は、3号墓との切り合いからII群のやや後に構築されている。



第1図 上山古墓群配置略図 (縮尺約1/200)

しかし、6号墓第2主体部の遺物が12世紀から13世紀代に位置づけられるところから、年代的な矛盾が生じる。6号墓における追葬の関係から生じたものとみるが、Ⅲ群は、Ⅱ群より先行するものと考えられ、築造の順は、1号墓が築かれた後に、Ⅲ群の7・5号墓が築かれてその後に、1号墓の周溝を埋め戻す形でⅡ群が築かれたと考える。その後、Ⅱ群に追葬などが行われる際に、6号墓が築かれたものと考える。Ⅳ群は、その配置と造営に時間差があることなどから同族の墓群ととらえたい。

Ⅳ群は、火葬墓と上葬墓の違いはあるが、埴丘に施された石組みの形態が酷似している。葬法の違いが時期差を示さないものであることを示しているものと考える。

Ⅴ群は、ほぼ一边が3mの方形の墓で埴頂に方形の集石を持つ特徴がある。葬法も土葬で、ほぼ13世紀前半の土師器を伴っている。

Ⅵ群は、規模の大きい中核的な9号墓に10号墓が寄り添うように作られている。さらに今回の調査区外の埴丘もす

ぐそばに2基ほど見受けられ、最終的には、4基前後で群をなす同族墓的なものを推定した。

V群は、土壙墓で墳丘を持たない。周辺の墳丘墓が作られた後、空いたスペースを利用して作られたものと考えられ、他の群との成立した後のやや後出的なものと考えた。

5. 調査区以外の墓群

以上であるが、本墓群は、今回調査したもののはか、17基程の墳丘の高まりが確認される。その間をぬって墓道と考えられる空闊地が見受けられこれによっても墓群構成が一部読み取れる。今後の調査の指針となるものと考えられるので若干の説明を加えておきたい（第1図参照）。

測量にみる墳墓と思われる高まりはア～チまでである。群として考えられるのは大きくみて、ア～オまでと、カ～ソで、タ・チの墳丘は、VI群に組入れられると考える。ア～オまでは、墓群の南東側に列をなすように北東から南西に続いている。その北西側にはほぼ平行に空闊地が細長く伸びており、8号墓から2号墓まで続く。本墓群の主要な墓道と考えられる。カ～ソは、ソを中心として群をなすものと考える。ソは、十星状の高まりが方形に巡りその内側に低い平坦面が有り、そこに円形の集石がみられる遺構で墓群全体の中に有って特殊な形態をもつ遺構である。その背後に墓群が続くがこの方形の土壙状遺構を意識して各墳丘が築かれており、群を形成するものと考えた。この群の中でもおそらくいくつかに区分できると考えるが、それについては、今後の調査により明らかにしたい。

6. 墓道について

墓道は、最も明確にみられるものが、丘陵南から、墳丘カとオの間をぬけチ・ウ間から9・8・5号墓とア・イ・ウの墳丘の間から2号墓の南側まで続くものである。幅は、2m前後で本墓群の中でも幹線的なものと考える。この墓道は、おそらく8号墓と5号墓の間から枝線的に別れ、11～15号墓に至るものと考える。幅1m程度であるが、平坦にならされている。このほかに、墳丘カ～ケの南西側に幅約2mのテラスがあり、ここを通ってキ・ク間あるいは、ク・ケ間をぬけ墓群の中に入るものもある。このほかア～オの南東側を通り、8号墓南側で幹線道に連結するものも想定できる。これらの墓道は、墓群への進入路という目的のほか、道そのものが墓前での祭儀空間であったり、他の墓とのあるいは、墓群との区画を意識して計画的に配置されているものと考えられる。「一ノ谷中世墳墓群」の場合後代になって、墓道も墓域として利用されているようであるが、本墓群の場合19号墓が若干その傾向を見せるのみで、墓道が墓域として利用された痕跡は、ほとんどみられない。これは、この地域がそれほど長期間にわたって利用されていないためで、せいぜい百数十年程度の期間で造墓が終了していることに起因するものと考えられる。その意味で本墓群は、中世初期の群集墳の形態を非常に分りやすく残しているものと考えられる。しかしながら造墓が短期間で終了したとすると、それ以降の造墓がどこに移ったかが問題となる。単に地形的制約で造墓を終了するにしても、この墓群の北側に広がる緩斜面や、谷を隔てた試掘調査区の平坦面にこの墓群に続く墓域が設定されてもよさそうであるが、そうした痕跡は止めておらず、気にかかるところである。周辺の調査が必要であると考える。

第2表 墓丘墓・土塚墓・集石一覧表

NO	遺跡名	位 置	地 形	(m)	墳 高	頂 部 諸 部 分	主軸方位	長軸×短軸 (m)	長軸×短軸 (m)	形 状	主 軸 部 深さ	(m)	備 考	
1	1号墓	X=79218 79226 Y=21406 21418	N41°-E	方形	10.50*7.12*1.05	N28°-E	方形	3.28*2.36	円形2*所	火葬	0.28*0.20*0.67	火葬	周溝(?)、焼骨分布	
2	2号墓	X=79212 79216 Y=21415 21418	N47°-E	方形	5.11*4.63*0.89	N41°-E	2段石壇	4.20*1.47	不明	火葬	0.32*0.29*?	火葬	五輪塔、焼骨分布	
3	3号墓	X=79212 79215 Y=21415 21418	N38°-E	方形	2.80*1.89*0.56	N39°-E	方形	1.43*1.24	不明	火葬	3.00*2.26*?	火葬	周溝(?)、焼骨分布	
4	4号墓	X=79217 79220 Y=21416 21419	N35°-E	長方形	2*2.75*0.70	N37°-E	石組 方形	2.00*1.64	円形	火葬	0.25*0.25*0.37	火葬	上面に焼骨、土壙器皿	
5	5号墓	X=79214 79220 Y=21406 21411	N40°-E	方形	4.26*3.45*0.65	N34°-E	石組 方形	2.54*2.42	円形?	火葬	0.34*0.30*0.48	火葬	焼骨分布	
6	3-1号墓	X=79216 79218 Y=21411 21413	—	—	—	N34°-E	石組 方形	1.60*1.43	円形	火葬	0.15*0.15*0.67	火葬	焼骨分布	
7	4号墓	X=79218 79222 Y=21404 21408	N47°-E	方形	2.89*2.73*0.51	N42°-E	石組 方形	1.94*1.77	円形	火葬	0.15*0.15*0.67	火葬	焼骨分布	
8	5号墓	X=79208 79208 Y=21410 21413	N53°-E	不整円	4.56*3.88*0.35	N68°-E	石組 方形	1.70*1.59	方形	火葬	0.15*0.15*0.67	火葬	土壙器 烧骨	
9	6号墓	X=79211 79211 Y=21403 21408	N49°-E	長方形	5.49*3.68*0.56	N48°-E	石組 方形	3.58*1.90	円形2*所	火葬	0.15*0.15*0.67	火葬	土壙器 烧骨	
10	7号墓	X=79214 79216 Y=21401 21405	N43°-W	橢円形	3.97*3.43*0.51	N43°-W	石組 方形	2.20*1.44	不明	火葬	0.15*0.15*0.67	火葬	土壙器 烧骨	
11	8号墓	X=79205 79208 Y=21405 21409	N3°-E	橢円形	6.58*3.63*0.61	N30°-E	石組 方形	1.33*1.28	不明	火葬	0.15*0.15*0.67	火葬	土壙器 8枚一括	
12	9号墓	X=79201 79212 Y=21398 21404	N6°-E	橢円形	11.40*6.35*1.69	N56°-E	石組 方形	4.30*2.85	円形	火葬	0.15*0.15*0.67	火葬	土壙器型に星雲 星満天作?	
13	10号墓	X=79205 79209 Y=21395 21398	N8°-E	橢円形	3.42*2.77*0.28	N53°-E	石組 方形	1.56*1.41	不明	火葬	0.15*0.15*0.67	火葬	土壙器	
14	11号墓	X=79210 79215 Y=21390 21394	N20°-W	方形	4.05*3.77*0.94	N29°-W	石組 方形	2.78*2.14	方形	火葬	0.50*0.60*0.52	火葬	方形3段?	
15	12号墓	X=79216 79220 Y=21389 21393	N35°-W	方形	3.38*2.69*0.38	N27°-W	石組 方形	1.86*1.52	円形	火葬	1.12*0.95*0.38	火葬	方形3段?	
16	13号墓	X=79214 79218 Y=21394 21398	N46°-W	方形	2.67*2.67*0.31	N27°-E	石組 方形	1.64*1.60	円形	火葬	0.65*0.59*0.62	火葬	方形3段?	
17	14号墓	X=79210 79201 Y=21395 21401	N30°-W	方形	3.58*3.69*0.49	N32°-W	石組 方形	2.21*2.26	円形	火葬	1.52*1.50*0.42	火葬	土壙器	
18	15号墓	X=79228 79231 Y=21386 21401	—	—	—	N2°-W	石組 方形	2.20*2.11	—	火葬	0.15*0.15*0.67	火葬	土壙器	
19	16号墓	X=79225 79229 Y=21404 21408	N23°-E	橢円形	3.55*2.84*0.56	N27°-E	石組 方形	2.76*2.04	不明	火葬	0.15*0.15*0.67	火葬	土壙器	
20	17号墓	X=79221 79224 Y=21395 21394	N23°-E	方形	2.36*2.16*0.24	N19°-E	石組 方形	1.14*1.08	不明	火葬	0.05*0.05*0.67	火葬	土壙器	
21	18号墓	X=79219 79223 Y=21401 21404	—	—	—	N40°-W	石組 方形	2.61*2.35	円形	火葬	0.05*0.05*0.67	火葬	土壙器	
22	19号墓	X=79212 79216 Y=21388 21402	—	—	—	N37°-W	石組 方形	3.57*2.78	円形	火葬	0.15*0.15*0.67	火葬	土壙器	

(4) 黒川上山古墓群出土の焼骨について

富山医科薬科大学医学部第1解剖学教室 森沢佐歲

はじめに

黒川上山古墓群（所在地：富山県中新川郡上市町黒川字上山）の調査は、平成6年5月13日～7月27日にわたり、上市町教育委員会が主体となり行なわれた。今回調査の墓群22基のうち、NO.1、NO.2、NO.2-1、NO.5、NO.11の墳丘主体部およびNO.6の第1主体部【NO.6・1】、第2主体部【NO.6・2】の合計7主体部、ならびにNO.2関連の藏骨器2個【NO.2・②、NO.2・④】、NO.3-1の藏骨器【NO.3-1】およびNO.2-2の藏骨器【NO.2-2】の合計4藏骨器（整作年代：13～14世紀）から骨片群が出土した。以下に述べるようにこれらの出土骨はいずれも火熱を受けた人焼骨である。

この遺跡の出土骨の個体数を検討するにあたり、各出土骨は骨種と部位を同定しうる大骨片と、骨種は概ね同定しうるが部位の不明な小骨片とおよび、骨種、部位とも不明な粒状骨とに分類した。さらに、人骨の個体数は、性や年齢に伴う人骨の特徴について、重複する部分骨の比較、左右側の個体識別などにより推定した。

1 主体部出土骨

主体部出土骨の重量は、NO.1：25 g、NO.2：34 g、NO.2-1：138 g、NO.5：36 g、NO.6・1：140 g、NO.6・2：136 g、NO.11：140 gで、合計7主体部の総重量は649 gである。NO.6・2には炭化物が認められるが、いずれの出土骨にも獸骨などはみられない（表1）。

a. 出土骨の骨種

NO.1：体肢骨の小骨片群である。

NO.2：頭蓋骨の小骨片1個と体肢骨の小骨片群である。

NO.2-1：頭蓋骨（上顎骨）の大骨片1個および頭蓋・体幹・体肢骨の小骨片群（137 g）である。

NO.5：体肢骨の小骨片群である。

NO.6・1：頭蓋骨（後頭骨、側頭骨）の大骨片3個および頭蓋・体幹・体肢骨の小骨片群（138 g）である。

NO.6・2：頭蓋骨（後頭骨）の大骨片1個および頭蓋・体幹・体肢骨の小骨片群（131 g）である。

NO.11：頭蓋骨（側頭骨、頸骨）、体肢骨（膝骨）の大骨片3個（3 g）および頭蓋・体肢骨の小骨片群（137 g）である。

大骨片の骨種

頭蓋骨（10 g）として、後頭骨、側頭骨、頸骨、上顎骨の4種の大骨片が出土する。体肢骨（1 g）として、膝骨の大骨片が出土する。体幹骨の大骨片はない。

小骨片の骨種

頭蓋骨60 g、体幹骨7 g、体肢骨571 gであるが、部位は同定できない。

b. 観察個数

大骨片はNO.2-1、NO.6・1、NO.6・2、NO.11の合計4主体部の出土骨にみられる。以下、部位の観察個数と出土地点を記す。

後頭骨

1) 外側部で後頭頸を含む部位：右1個【NO.6・1】、2) 後頭鱗中央部で内後頭隆起を含む部位：1個【NO.6・2】。側頭骨

1) 鋸体乳突部で頸動脈管を含む部位：右1個：【NO.6・1】、2) 側頭鱗部で頸骨突起を含む部位：右1個【NO.6・1】、左1個【NO.11】。

頸 骨

1) 前頭突起：右1個 [NO.11]。

上顎骨

1) 前頭突起：左1個 [NO.2-1]。

腓 骨

1) 骨体：左1個 [NO.11]。

大骨片の部位の重複は確認されない。

c. 所 見

性や年齢に伴う人骨の特徴について、頭蓋骨および体肢骨の大骨片（4主体部出土）の形状は成人骨と思われ、頭蓋骨、体幹骨、体肢骨の小骨片（7主体部出土）の緻密質の厚径からはいずれも成人骨と推定される。一方、これらの骨片は焼骨で、その色調は白色であり、骨質は硬く、その破線は鋭利である。しかし、火熱による変形のため各骨片とも連結しえなかった。また、どの出土骨の骨片とも重複部位を認めない。

以上、この遺跡の主体部出土骨 [NO.1、NO.2、NO.2-1、NO.5、NO.6・1、NO.6・2、NO.11] は各主体部とも成人骨1個体分、合計7個体分と推定される。

2 藏骨器内出土骨

藏骨器内出土骨の重量は、NO.2・②：123 g、NO.2・④：1219 g、NO.3-1：50 g、NO.2-2：36 gで、藏骨器4個内の総重量は1428 gである（表2）。各出土骨は原則として藏骨器内の上位（U）、中間位（I）、下位（L）に分け出土する。NO.2・②の下位出土骨には炭化物2片含まれるが、いずれも土器片、獸骨など見られない（表2）。以下、各出土骨の特徴、観察個数、所見の順に記す。

1. 出土骨 [NO.2・②]

藏骨器内の上位（U：5 g）、中間位（I：46 g）、下位（L：72 g）より出土する。

a. 骨種：頭蓋骨（上顎骨：I）、体肢骨（指節骨：I）の大骨片2例（2 g）および頭蓋骨の小骨片群（8 g：U、I、L）、体肢骨の小骨片群（113 g：U、I、L）である。

b. 観察個数：上顎骨前頭突起：右1個および手の指節骨：母指末節骨1個である。大骨片の部位の重複は観察されない。

c. 所見：大骨片の形状、小骨片群の緻密質の厚径から、この出土骨は成人骨であり、頭蓋（冠状）縫合内板が部分的に施着完了していることから、壮年期～熟年期の性別不明な人骨と推定される。

2. 出土骨 [NO.2・④]

藏骨器内の上位（U：3 g）、中間位（I：444 g）、下位（L：722 g）より出土する。

a. 骨 種

上位（U）：頭蓋骨（蝶形骨、側頭骨）の人骨片2個（2 g）および体肢骨の小骨片4個（1 g）である。

中間位（I）：大骨片として、頭蓋骨（29 g）、体幹骨（32 g）、上肢骨（12 g）、下肢骨（44 g）の合計117 gであり、小骨片として、頭蓋骨（26 g）、体幹骨（19 g）、体肢骨（282 g）の合計327 gである。

下位（L）：大骨片として、頭蓋骨（79 g）、体幹骨（36 g）、上肢骨（43 g）、下肢骨（125 g）の合計283 gであり、小骨片として、頭蓋骨（47 g）、体幹骨（34 g）、体肢骨（358 g）の合計439 gである。

大骨片の骨種

頭蓋骨（110 g）として、後頭骨（I、L）、蝶形骨（U、L）、側頭骨（U、I、L）、頭頂骨（I、L）、前頭骨、鼻骨、鎖骨（L）、上顎骨（I、L）、口蓋骨、頬骨（L）、下顎骨（I、L）の11種の大骨片と脱落歯13個（I、

L) が出土し、篩骨、下鼻甲介、涙骨、舌骨はみあたらない（図1～図4）。

体幹骨（68 g）として、頸椎・胸椎・腰椎・仙骨・肋骨・胸骨（I, L）の6種が出土し、尾椎はみあたらない。

上肢骨（55 g）として、肩甲骨（I, L）、鎖骨・上腕骨（L）、橈骨・尺骨・手根骨・中手骨・指節骨（I, L）の8種が全て出土する。

下肢骨（169 g）として、寛骨・大腿骨（L）、脛骨・腓骨（I, L）、膝蓋骨（L）、足根骨（I, L）、中足骨（L）、指節骨（I, L）の8種が全て出土する。

小骨片の骨種

頭蓋骨73 g、体幹骨53 g、体肢骨641 gであるが、部位は同定できない。

粉状骨（50 g）は粒状小塊で、骨種、部位とも同定できない。

b. 観察個数

大骨片は骨種と部位が同定できるので、各骨に分類し、さらに同定部位を包含する。以下、頭蓋の部位の観察個数を記す。

頭蓋骨

- (a) 後頭骨 1) 側頭部で後頭頸・舌下神経管を含む部位：右1個（L）、左1個（I）、2) 後頭鱗中央で内外後頭降起を含む部位（L）、3) 後頭鱗ラムダ縁を含む部位（I）。
- (b) 横形骨 1) 大翼基部で、卵円孔を含む部位：右1個（L）、左1個（I）、2) 大翼の頸頂縁を含む部位：左右各1個（L）。
- (c) 側頭骨 1) 雜体乳突部で頸動脈管・内耳孔を含む部位：右1個（L）、左1個（L）、2) 側頭鱗部で頸骨突起を含む部位：左右各1個（L）、3) 横形骨縁：左右各1箇（U, L）。
- (d) 頸頂骨 1) 横形骨角：右1個（L）、左1個（I）、2) 乳突起：右1個（I）、3) 矢状縁：左右各1箇（I）、4) 後頭縁：左1箇（I）。
- (e) 前頭骨 1) 前頭鱗頸骨突起部：左右各1箇（L）、2) 鼻部：1箇（L）。
- (f) 鼻骨 1) 上縁：左右各1箇（L）。
- (g) 鋸骨 1) 鋸骨翼：1箇（L）。
- (h) 上顎骨 1) 上顎体で梨状口縁を含む部位：左右各1箇（L）、2) 前頭突起：左右各1箇（L）、口蓋突起：右2箇（L×2）、左1箇（I）。
- (i) 口蓋骨 1) 水平板：左右各1箇（L）。
- (j) 頬骨 1) 前頭突起：左右各1箇（L）、2) 上顎突起：左1箇（L）。
- (k) 下顎骨 1) 下顎枝下頸頸部：左右各1箇（L）、下顎枝筋突起：左1箇（L）、3) 下顎体正中歯槽部：1箇（I）。
- (l) 脱落歯 1) 永久歯齒冠：犬齒1箇（I）、小臼齒1箇（L）、2) 齒根で1根のもの：10箇（I：4箇、L：6箇）、3) 歯根で3根のもの：1箇（L）。

頭蓋骨のうち、右上顎骨の口蓋突起（h-2）は2個体分観察される。

体幹骨、上肢骨では部位の重複が観察されない。

下肢骨では左寛骨の大坐骨切痕を含む部位（L×2）、左寛骨の寛骨臼・坐骨結節を含む部位（L×2）、左蹠骨の載距突起（I, U）が各々2個体分観察される（図5）。

頭蓋骨、下肢骨の観察個数より、個体数は最小限2個体ある。

c. 所 見

脛頭蓋骨の内板・外板は厚い。ラムダ縫合の内・外板は癒着を認めないが、矢状縫合の内板では完了している。側頭骨左右には乳突鱗状縫合が癒着消失している。乳様突起左は小さい。後頭骨の外後頭隆起は弱い。前頭骨の眉間、眉弓の膨隆は強い。鼻骨上顎縫合は一部癒着消失する。頬骨右は中等度（最大幅：40mm、最大高：40mm）。下頬枝は広く、筋突起左右は鳥帽子型である。翼突筋粗面の凹凸は強い。下顎切痕は深い。犬歯、小臼歯各1個の咬耗度はマルチンの1~2度である。頸椎体、腰椎体の辺縁には骨増殖が認められる。手足の指節骨の骨端は癒着完了している。寛骨左右の腸骨翼は厚く、頑丈である。

この出土骨は壮年期～熟年期の男性骨1個体分と性別不明骨少なくとも1個体分の合計2個体分と思われる。

3. 出土骨 [NO.3-1]

蔵骨器内の上位（U：16g）、下位（L：34g）より出土する。

- a. 骨種：頭蓋骨（側頭骨、前頭骨：L）の大骨片（4g）および頭蓋骨の小骨片群（46g）である。
- b. 観察個数：側頭骨全体乳突部で内耳孔を含む部位：左1個、前頭骨前頭鱗頬骨突起部：右1個である。

NO.2・④以外の少量出土骨の大骨片には出土骨間の接合、重複ともみられないが、多量出土骨のNO.2・④の大骨片中に同一部位がみられる。

- c. 所見：頭蓋骨の大骨片の形状、小骨片群の緻密質の厚径から成人骨と思われるが、性別および年齢など詳細不明である。

4. 出土骨 [NO.2-2]

蔵骨器内より一括出土する。

- a. 骨種：頭蓋骨の小骨片群（4g）、体肢骨の小骨片群（32g）である。
- b. 所見：頭蓋骨・体肢骨の小骨片群は成人骨と思われるが、性別および年齢など詳細不明である。

3まとめ

上市町黒川上山古墓群の平成6年度調査（22基の墓を調査）の際、主体部7ヶ所および蔵骨器4個の内部から焼骨群が発見された。主に個体数を検討したので、以下に述べる。なお、出土骨は大骨片、小骨片、粉状骨とに分類し、主に大骨片の形態を観察した。

- 1) 主体部出土骨の総量はNO.1：25g、NO.2：34g、NO.2-1：138g、NO.5：36g、NO.6・1：140g、NO.6・2：136g、NO.11：140gで、いずれも少量である。
- 2) 主体部出土骨の大骨片として、後頭骨 [NO.6・1、NO.6・2]、側頭骨左右 [NO.6・1、NO.11]、頬骨右 [NO.11]、上顎骨左 [NO.2-1]、腓骨左 [NO.11] の大骨片の部位が観察される。部位の重複、大骨片間の接合はみられない。
- 3) 主体部出土骨の個体数は、性別不明な成人骨各1個体分、合計7個体分と推定される。
- 4) 蔵骨器内出土骨の総重量はNO.2・②：123g、NO.2・④：1219g、NO.3-1：50g、NO.2-2：36gであり、NO.2・④の他の出土量は少ない。
- 5) 蔵骨器内少量出土骨の大骨片として、側頭骨左 [NO.3-1]、前頭骨 [NO.3-1]、上顎骨右 [NO.2・②]、手の母指未節骨 [NO.2・②] の大骨片が観察され、部位の重複、大骨片間の接合はみられない。
- 6) 蔵骨器内少量出土骨の個体数は、いずれも性別不明な壮年期～熟年期骨1個体 [NO.2・②] および成人骨各1個体 [NO.3-1、NO.2-2] の合計3個体と推定される。
- 7) 蔵骨器内多量出土骨 [NO.2・④] の大骨片として、全身骨格の大骨片（頭蓋骨：110g、体幹骨：68g、上肢骨：55g、下肢骨：169g）の部位が、蔵骨器の上位、中間位、下位のいずれにも混在している。

- 8) 藏骨器多量出土骨〔NO.2・④〕のうち、上顎骨右、寛骨左、踵骨左は2個体分観察される。
- 9) 藏骨器多量出土骨〔NO.2・④〕の所見より、この出土骨の性・年齢構成は壮年期～老年期の男性骨1個体および同年齢の性別不明骨少なくとも1個体分の合計2個体分と推定される。
- 10) 骨の異常増殖として、頸椎体、腰椎体の辺縁に認められる〔NO.2・④〕。

最後に貴重な資料の検査をお許しくださいました関係各位に深く感謝いたします。

関連文献

- 森沢佐蔵、篠原治道、大谷修「香城寺惣堂遺跡第10号墓藏骨器内出土骨について」『医王は語る 第二章 医王山文化調査委員会編、169-173ページ・富山県福光町、1993
- 森沢佐蔵「萩田薬師横穴墓群の出土人骨について」『萩田薬師中世墓発掘調査報告書』水見市教育委員会編、16-25ページ・水見市教育委員会、1985
- 森沢佐蔵「栗田椿原遺跡出土骨概要」『栗田椿原遺跡・南中田A遺跡・任海鎌倉遺跡・南中田C遺跡』富山県埋蔵文化財センター編、117ページ・富山県埋蔵文化財センター、1990
- 森沢佐蔵、松田龍史「武者野火葬骨〔第48次調査出土骨〕について」『朝倉氏遺跡資料館紀要一九八六』朝倉氏遺跡資料館編、27ページ・福井県立朝倉氏遺跡資料館、1987

表1 出土骨の重量(Ⅰ)

(単位:g)

分類	出土骨	NO.1	NO.2	NO.2-1	NO.5	NO.6-1	NO.6-2	NO.11
大骨片								
頭蓋骨	0	0	1	0	2	5	2	
体幹骨	0	0	0	0	0	0	0	
上肢骨	0	0	0	0	0	0	0	
下肢骨	0	0	0	0	0	0	1	
計		0	0	1	0	2	5	3
小骨片								
頭蓋骨	0	1	22	0	25	2	10	
体幹骨	0	0	1	0	2	4	0	
下肢骨	25	33	114	36	111	125	127	
計	25	34	137	36	138	131	137	
粒状骨	0	0	0	0	0	0	0	
合計	25	34	138	36	140	136	140	

表2 出土骨の重量(Ⅱ)

(単位:g)

分類	出土骨	NO.2-②			NO.2-④			NO.3-1			NO.2-2			
		U	I	L	U	I	L	計	U	L	計	U	L	計
大骨片														
頭蓋骨	0	1	0	1	2	29	79	110	0	4	4	0	0	0
体幹骨	0	0	0	0	0	32	36	68	0	0	0	0	0	0
上肢骨	0	1	0	1	0	12	43	55	0	0	0	0	0	0
下肢骨	0	0	0	0	0	44	125	169	0	0	0	0	0	0
計		0	2	0	2	2	117	283	402	0	4	4	0	0
小骨片														
頭蓋骨	1	2	5	8	0	26	47	73	16	30	46	4	0	0
体幹骨	0	0	0	0	0	19	34	53	0	0	0	0	0	0
下肢骨	4	42	67	113	1	282	358	641	0	0	0	32	0	0
計	5	44	72	121	1	327	439	767	16	34	50	36	0	0
粒状骨	0	0	0	0	0	0	50	50	0	0	0	0	0	0
合計	5	46	72	123	3	444	772	1219	16	34	50	36	0	0

* : U:上位、I:中位、L:下位

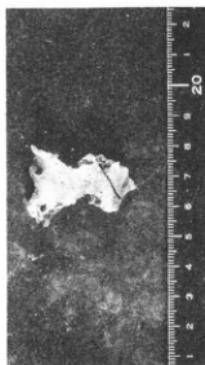


図1 No2-1・④
上位出土頭蓋骨



図2 No2-1・④ 中間位出土頭蓋骨
上にから後頭骨、頭頂骨左右十個
頭骨左右、上頸骨左、脱落歯の順



図3 No2-1・④ 下位出土頭蓋骨(Ⅰ)
上から前頭骨、頸骨左右、上頸骨左右、全
助骨、下頸骨、脱落歯の順



図4 No2-1・④ 下位出土頭蓋骨(Ⅱ)
上から後頭骨、側頭骨左右、蝶形骨の順

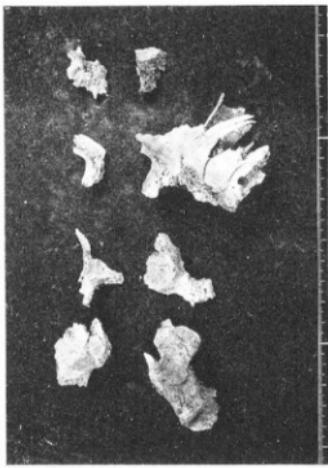


図5 No2-1・④ 出土骨(2個体分)
上から上頸骨右、寛骨左、寛骨右、蹠骨左の順

(5) まとめ

本墓群についていくつかの検討を試みたが、その中で得られた見解を整理してみると、

1. 本墓群で土体をなす墓の形態は、墳丘墓が圧倒的に多く、墳丘をもたない土壙墓や集石墓は、非常に少なく、未調査部分の地形をみると限りこの傾向は、本墓群全体の傾向であると考えられる。
2. 墳丘墓を内部構造で分類すると、今のところ6類に分けられる。不明なもの除去では上葬5に対し火葬13で、比較的に火葬がおおいことが判った。また、平面形は純粹な意味での円形ではなく、楕円形、方形、長方形、不整形のものがみられ、方形が10と最も多く、長方形、楕円形がそれぞれ2基と5基であった。
3. 墳丘墓は、そのほとんどに、方形の石組み、方形の縁石が施されており、その意味では墳丘墓のほとんどが方形を意識したものということができる。
4. 周溝をもつものは、1号墓と9号墓であるが、他のものにはほとんど周溝がみられない。1号墓、9号墓でも完全に巡るものではなく、全体の2/3ないし1/2しか巡らない。これらの周溝は、墳丘を個別的に区画するものではなく、墓群を区画するかのような配図がみられる。
5. 墓の拡張が顕著にみられるのは、2号墓周辺でもともとあった墳丘に、平坦面を作りつけたり、傍らに新たな墳丘を作りつけたりして構築されている。これらの拡張部には、珠洲焼の壺を蔵骨器として焼骨が埋葬されている。その時期は、おむね13世紀後半から14世紀に比定され、今回調査した墓の中では、最も新しい段階で拡張が行われたものと考えられる。こうした拡張は、本来、個人墓であった墳丘墓が家族墓や同族墓に変質していった過程を示すものと考えられる。拡張されたものの内2号墓には、13世紀前半のものと考えられる五輪塔が伴っており、祭壇状の石組みも作り付けられている。追善などの施設と考えられ、注目される¹¹⁾。
6. 墓群全体の構造を考えるために、群分けを行った。その結果、現在のところ7群に分けられ、未調査部分でも最低2群に分けられる。調査した墓群について考えると、13世紀代に、ほとんどの墳丘墓が作られたものと考えるが、1号墓をはじめとする1群は、これらのものより一時期古い段階での構築と考えられ、本墓群での初期の造墓は、12世紀末ないし、13世紀前半と想定した。
7. 土壙墓は、2基のみ今回確認できた。墳丘墓が作られた後にその空間をぬって作られた印象が強く、やや新しい段階での構築と考えた。
8. 集石には、15号墓がある。方形の緻密な石組みがなされているが、埋葬の跡は、確認できず、墓でない可能性がある。その場合、周辺に造墓があまりなく、ぽつんと作られている点なども考え合わせると、上部に構造物を想起させ、墳墓堂などの施設と想定した。このほか、4号墓から14号墓に続く段状の石積みが確認された。墓群を区画するためのものと考えたが、この石積みの北に15号墓が有ることからここを区画しているものかもしれない。
9. 墓道については、墓群全体の調査が終了しない段階でもある程度観察できるくらい顕著に認められた。これは、この墓群が墳丘墓を中心で造営され、その墓域が後世にあまり手が入っていないことによるものと考えられる。周辺にも造墓の痕跡がみられないことから、本墓群の造墓が終了した後、墓域がどこにいったのかが気に掛かるところである。

(1) 伊藤唯真「師宇記にみる中世葬祭仏教—墓・寺・僧の相互の関係を中心として—」(『席巣史学』3・4号、1977年)では鎌倉末期に至るまで墓前供養は、原則として一周年までであり、その後の追善は菩提寺院に移っていくことを指摘している。これ以前の古墓にあってもたとえ貴族の墓でも放置され、いずれの墓とも知れない姿をさらしていたことが当時の日記に記録されている。つまり、14世紀ごろに至るまで、墓参の風習はなく、多くの墓は、打ち捨てられていたと考えられる。しかし、本遺跡の祭壇状の造構は、長期にわたる供養を意識したものと考えられ、地域的な意味を含めて、墓参に対する意識の変化が読み取れると考えられ、興味深い。

以上のような分析の結果が得られたが、ここで、本墓群がどの様な背景で成立したかを考えてみたい。この事は、よりもなおさず、被葬者が誰か、どの様な人々なのかを考えることでもある。

本墓群は、おおむね12世紀末から14世紀前半の首數十年のあいだ墓所として認識されていたものと考えているが、正倒的に墳丘墓が多く、上塚墓、集石墓などは、極端に少ない。12世紀末の作と考えられている『餓鬼草紙』の疾行餓鬼や食糞餓鬼の図に見える墓地の有様、『一遍上人絵伝』の河野通信の墳墓などにみられるものとよく似ており、原型は、こうした形に類似しているものと考える（第2図参照）。これら絵巻物に見られる墳墓は、貴族の墓と考えられており、京都周辺の集落から離れたうらさびしい場所に作られており、都の外側に展開された平安時代の一番終りごろの墓地の姿であったと考えられている。本墓群の場合、古代から中世の集落跡が周辺で確認されているわけではないが、最も近い現在の黒川集落の付近になんらかの人々の営みがあったとすると、その北端の山間部に営まれておらず、集落から離れた場所を墓所としていた事がうかがわれる。地形と周辺の遺跡の項でもすでに述べたが、黒川の東側には、郷川あるいは、白岩川が、形成した扇状地が広がっており、古代から中世にかけて、堀江保、小森保と呼ばれるおそらくは、国衙領であったと考えられる「保」が営まれていたことが文献より伺われる。これらの保は、12世紀末ないし13世紀前半には、堀江社と呼ばれる祇園社に本所をもつ莊園へと変質したものと見られており、本墓群の初期現に対応する。これらの保あるいは、莊園の指導者層が本墓群を築いた可能性がある。しかしながら、宗教の面から黒川周辺の地域を見ると、今一つの可能性が見出される。それは、遺跡の周辺で見出される宗教遺跡の存在で、これに関わった僧侶などの墓所としての可能性である。本墓群の北東の穴の谷の靈場（元は修驗道の行者穴）、さらにつくその北東には弘法大師ゆかりの地と言われる「護摩堂（ゴマンドウ）」、さらに、黒川地内に所在した真言宗本覚院の寺伝に寛弘5年（1008）に真興上人によって現在の本覚院うら手の山中に開かれたものとされる真興寺（現在もその比定地には段状に平坦面が残っている。）などがそれで、周辺一帯の山地が真言宗の修業場であった可能性がある。現在のところこの2つの可能性があるがこの二者がからみあい本墓群を形成したとも考えられ、今後、周辺全体にわたる調査が必要である。上市町は、市街地の北東に真言宗の古刹、国指定史跡の大岩山日石寺（磨崖仏・京ヶ峰經塚、平安前期）、東に背洞宗の眼目山立山寺（眼目山旧開山堂遺跡、鎌倉後期）などの寺院や、南北朝期から戦国時代まで中新川一帯に勢力のあった土肥氏をはじめとする豪族の居館跡が存在しており、本墓群を形成する前後の古代から中世の遺跡が数多く見られる。これらがどの様な変遷をたどっているのかを考える上でも本墓群及び周辺の調査が今後重要なものと考える。

以上であるが、調査は、まだその緒についたばかりで、全容を明らかにするにはさらなる調査が必要である。墓群だけをとっても調査したのは、まだ全体の半分にみたない地域しか調査しておらず、この段階で試みた検討から結論を見出すのは、ややむりのあるところがある。しかしながら、幸にも本墓群が完全に保存されることが決定し、今後も調査を継続することとなった今、現時点で認識される事、あるいは、推定できることをまとめておくことは、今後、調査を進める上で方向性を模索する作業であると考えている。予見に満ちた部分も多くあるが、本遺跡の将来を考えた真摯な検討と、批判を乞いたい。

むすび

本墓群の調査は、平成6年5月から7月までの期間行った。調査がすすむ中で本墓群の重要性が次第に明らかとなる中で、遺跡を保存しようという気運がもりあがった。はじめは、表立った声ではなかったが、地元を中心に人から人へ今回の調査が話題となり、最終的には、この声が大きな力となり、全面的な保存にまでつながったものである。こうした意見に真摯に耳を傾け、保存を決定した町当局に対し敬意を表するとともに、地元黒川地区住民の皆様の理解と協力を感謝するものである。今後は、本遺跡や周辺の調査を深め、地域全体の中世の姿を明らかにすること、それを踏まえて、一般に公開できる環境整備が必要である。今後のさらなるご支援を御願いする次第である。



第2図 「餓鬼草紙」(河本家本)に見るさまざまな墓標 (若)

引用・参考文献

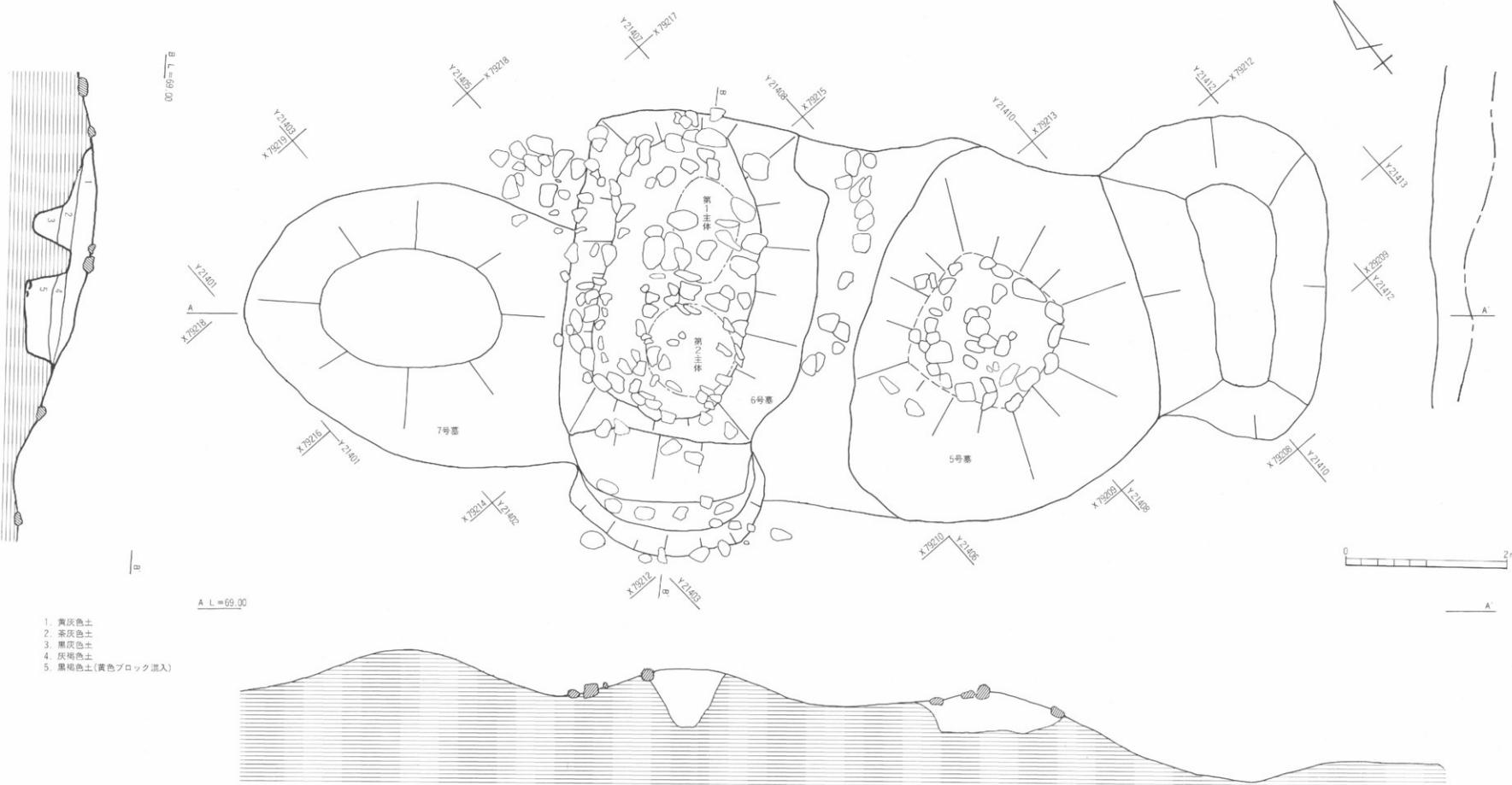
- ア 石井 進・萩原三雄編 1991 帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集『中世社会と墳墓－考古学と中世史研究－』名著出版
- 伊藤唯真 1977 「師守記にみる中世葬祭仏教－墓・寺・僧の相互の関係を中心にして－」『鷹陵史学』3・4号 仏教学大学出版
- 磐田市教育委員会 1993 「一の谷中世墳墓群遺跡」
- カ 『角川 日本地名大辞典 16富山県』 1980 角川書店
- 岸本雅敏 1979 「錢堀山遺跡の調査－井戸町清玄寺所在中世墳墓発掘調査概報－」富山県教育委員会
- 京田良志 1972 「寺跡・經塚・磨崖仏・建物跡など」『富山県史考古編』富山県
- 小松茂美編 1978 「日本絵巻大成7 鬼鬼草紙 地獄草紙 痞草紙 九相詩絵巻」中央公論社
- サ 坂詰秀一・森 郁夫編 1986 「日本歴史考古学を学ぶ 中」有斐閣
- タ 滝上秀明 1989 「辰口町湯屋チョウズカ遺跡」辰口町教育委員会
- 鳥取県東伯郡大栄町教育委員会・奈良大学文学部考古学研究室 1985 「妻波古墓」奈良大学文学部考古学研究室調査報告書第11集
- ナ 中川成夫 1959 「越後華報寺中世墓址詩群の調査」『立教大学文学部史学科調査報告4』
- 中野豈任 1988 「忘れられた靈場」平凡社
- 西井龍儀ほか 1993 「医王は語る－医王山文化調査報告－」福光町・医王山文化調査委員会
- ハ 棚原町教育委員会 1978 「奈良県宇陀郡大王山遺跡」奈良県立橿原考古学研究所
- 藤井正雄 1988 「墓地墓石大辞典」雄山閣
- 藤田富士夫 1984 「10杉谷群集墳」『富山市呉羽山丘陵古墳分布調査報告書』富山市教育委員会
- 北陸中世土器研究会 1992 「中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器」第5回北陸中世土器研究会資料
- 北陸中世土器研究会 1994 「中世北陸の寺院と墓地」第7回北陸中世土器研究会資料
- マ 埋蔵文化財研究会 1983 「古代・中世の墳墓について」第13回埋蔵文化財研究会資料
- 三浦純夫 1986 「第4章 考察 墓地の再評価をめぐって」『劍崎遺跡』石川県埋蔵文化財センター
- ヤ 古岡康暢 1989 「日本海域の土器・陶磁〔中世編〕－人類史叢書10－」六興出版
- 古岡康暢 1994 「中世須恵器の研究」吉川弘文館
- 四柳嘉章 1987 「西川島－能登における中世村落の発掘調査－」穴水町



第3図 墓群全図 (1/200) 1~19は調査対象の墳墓 (*XYは国土座標)

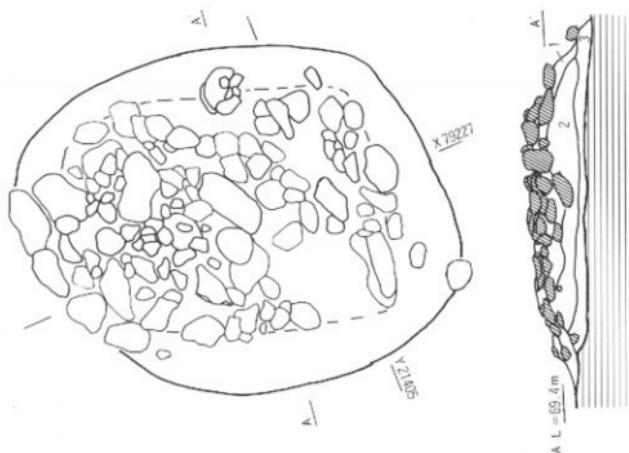


第4図 2号墓~3-1号墓実測図 (1/40)



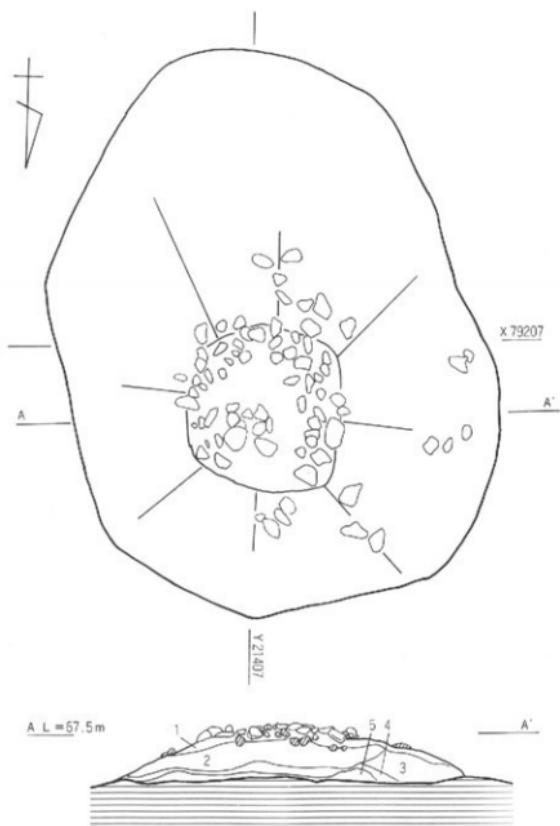
第5図 5号墓～7号墓実測図 (1/40)

第6図 16号墓実測図 (1/40)

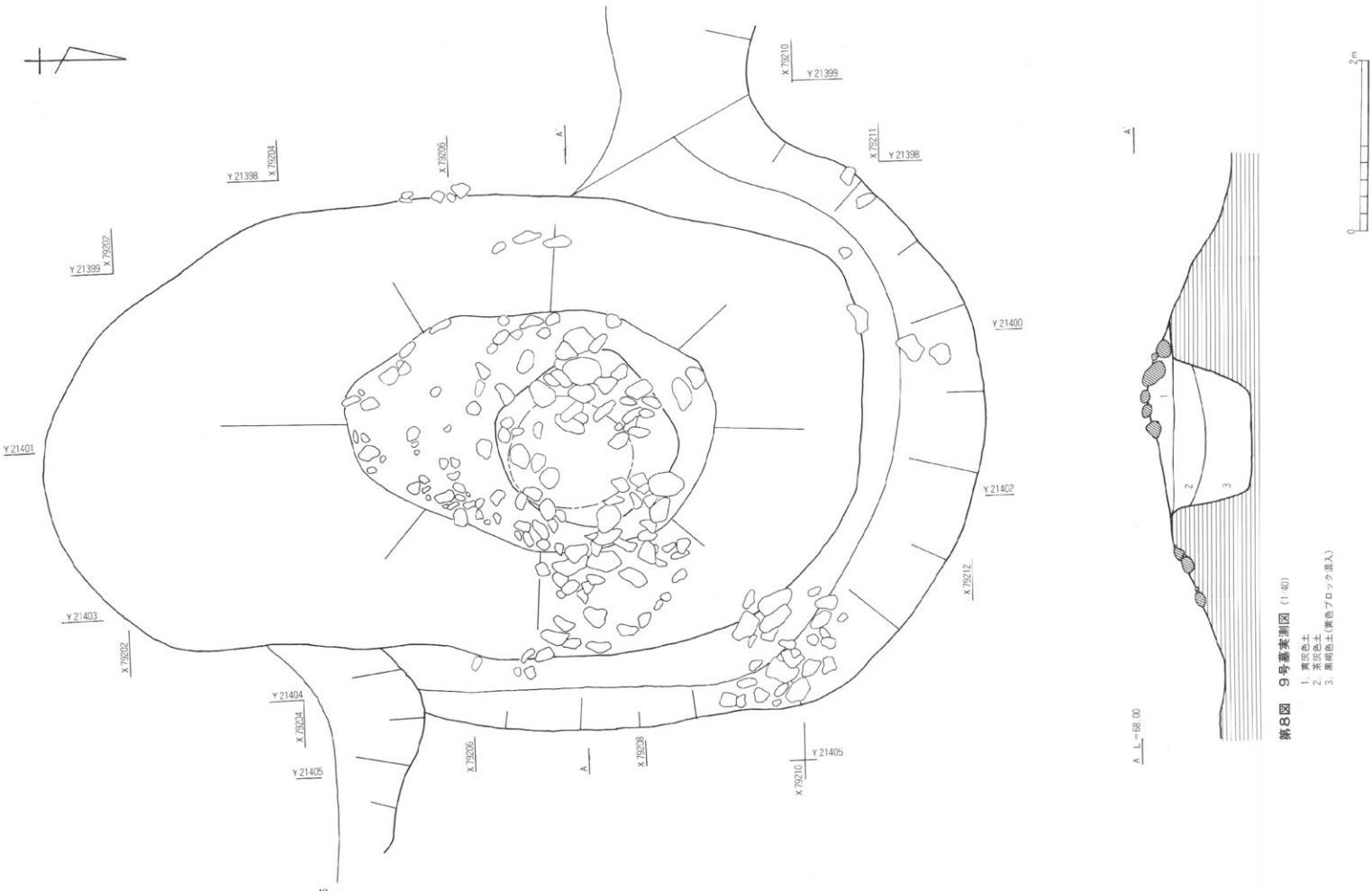


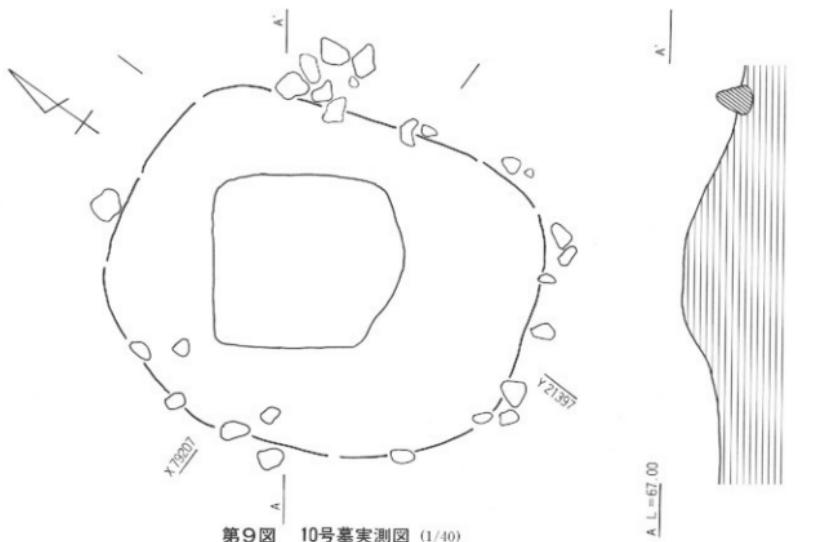
1. 黄褐色土
2. 茶灰色土(砂質)
3. 灰色土(灰)

第7図 8号墓実測図 (1/40)

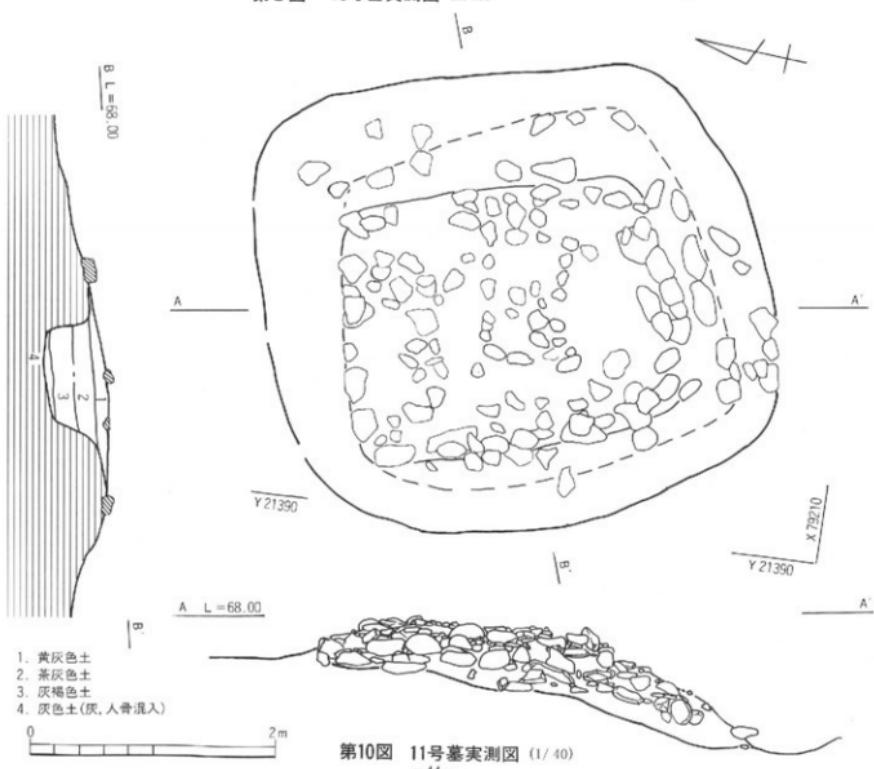


1. 黄褐色土
2. 灰色土(砂質)
3. 茶灰色土(砂質)
4. 黒灰色土
5. 灰色土(灰)





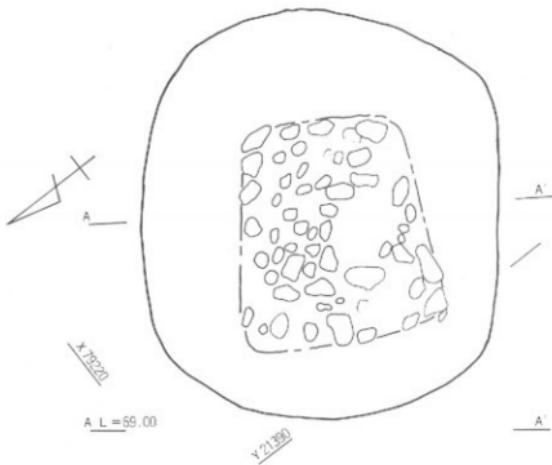
第9図 10号墓実測図 (1/40)



第10図 11号墓実測図 (1/40)

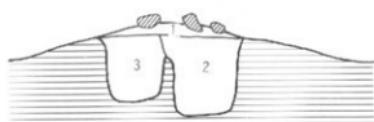
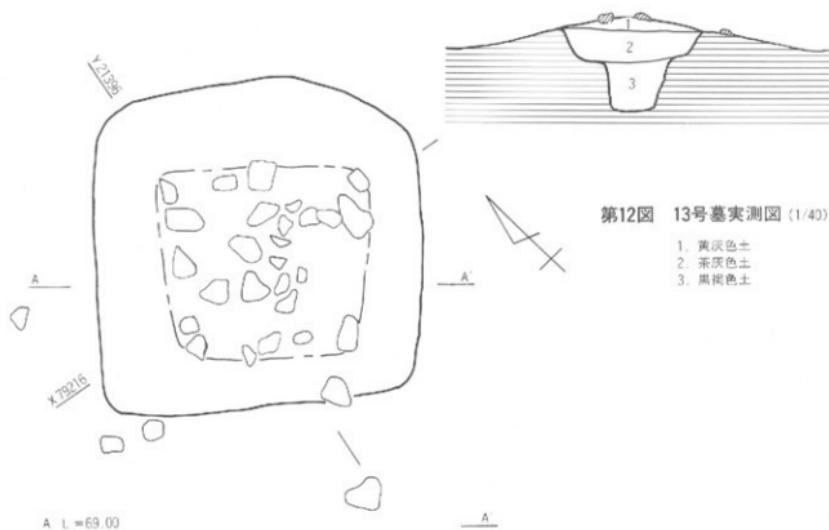
第11図 12号墓実測図 (1/40)

1. 黄灰色土
2. 茶灰色土
3. 黒褐色土

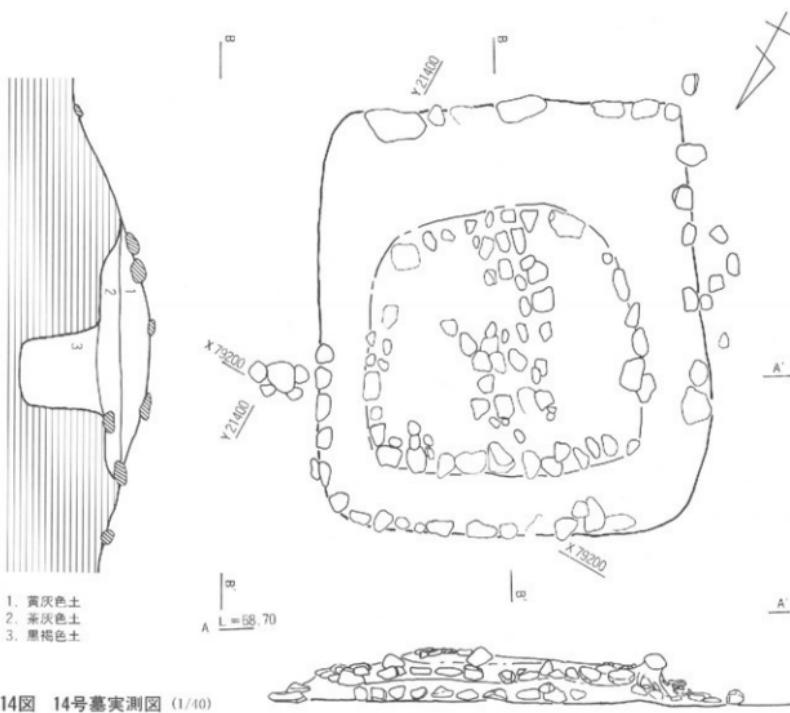
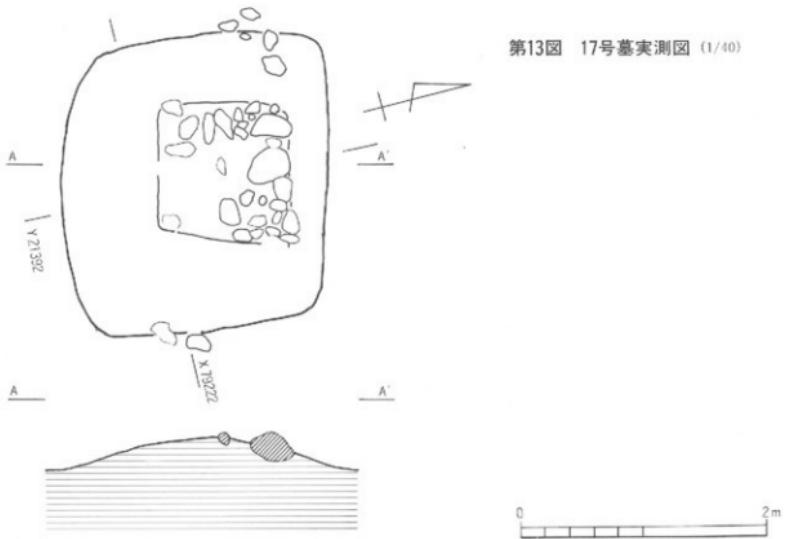


第12図 13号墓実測図 (1/40)

1. 黄灰色土
2. 茶灰色土
3. 黒褐色土



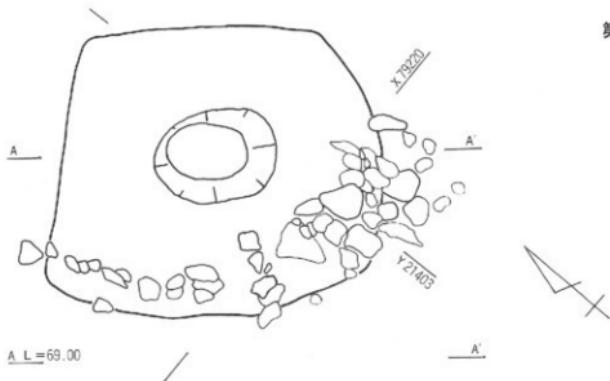
第13図 17号墓実測図 (1/40)



第14図 14号墓実測図 (1/40)

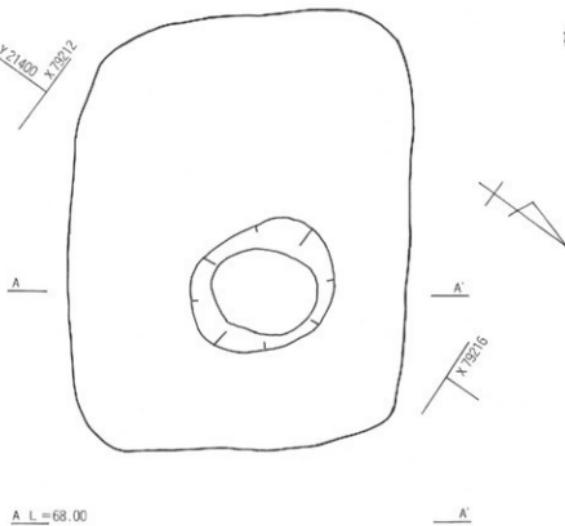
第15図 18号墓実測図 (1/40)

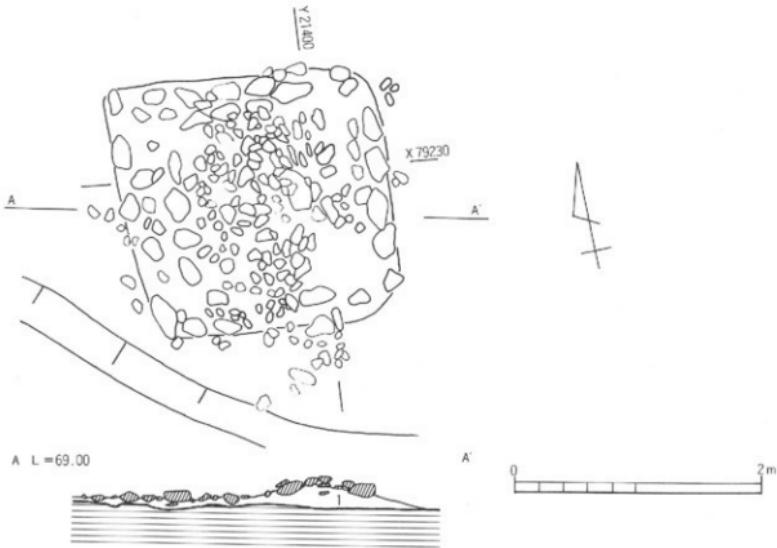
1. 黄灰色土



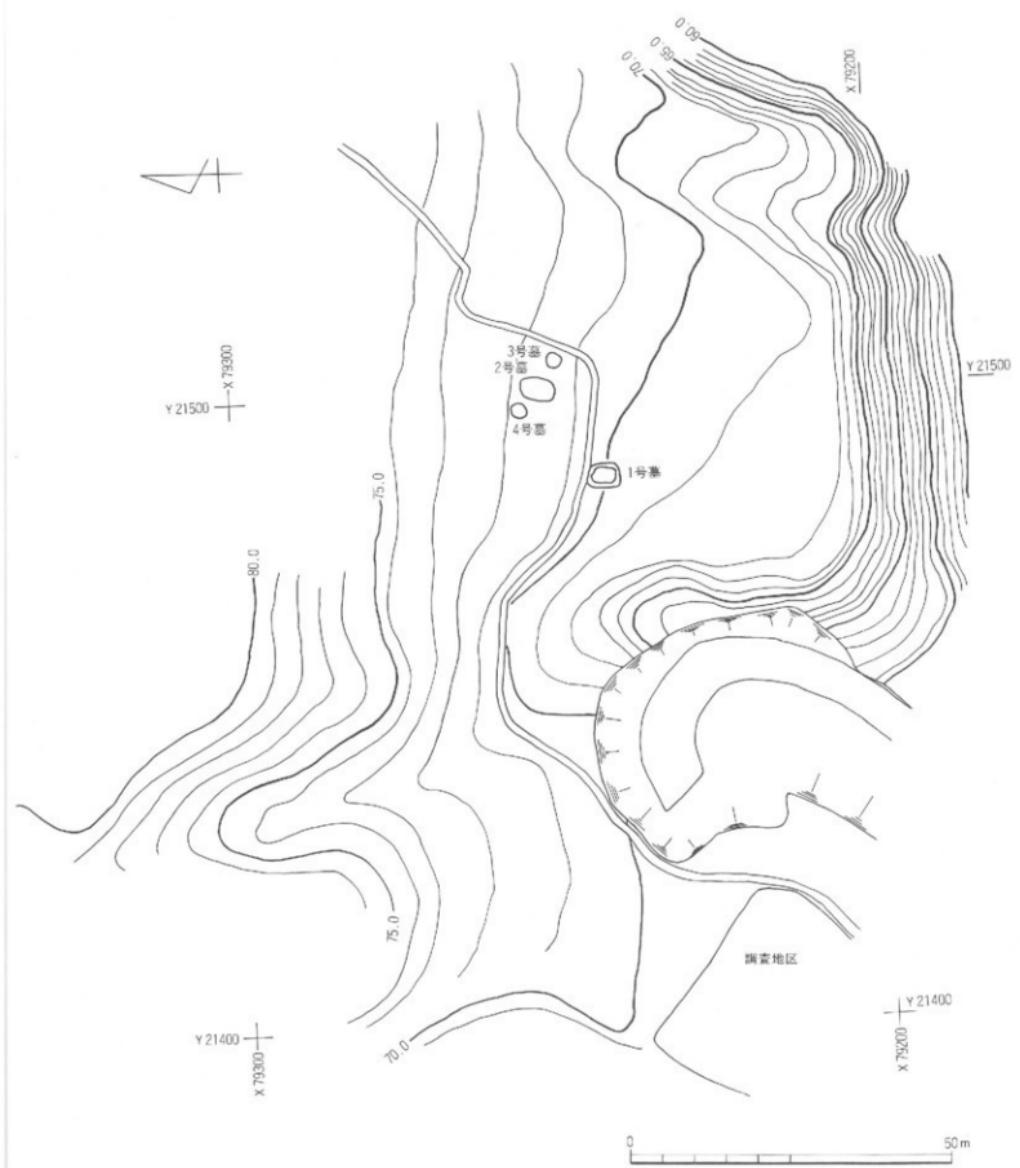
第16図 19号墓実測図 (1/40)

1. 黄灰色土





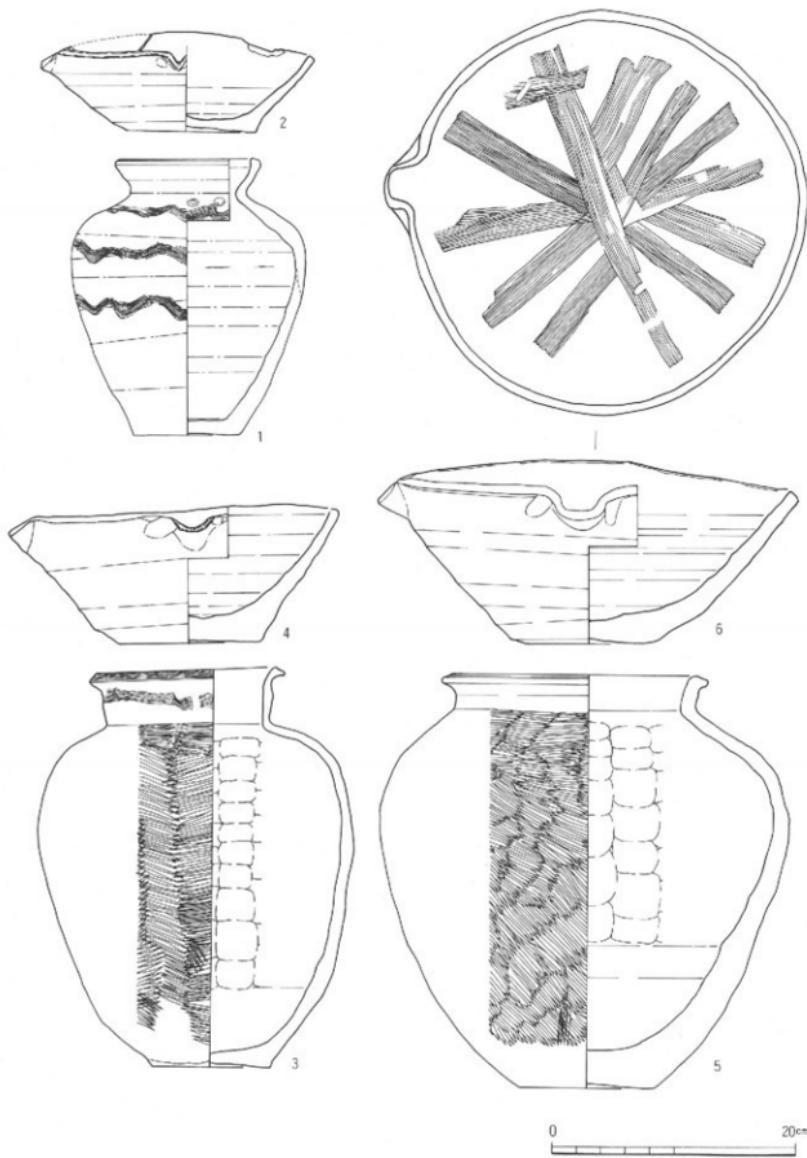
第17図 15号墓（集石）実測図（1/40）



第18図 黒川塚跡東遺跡地形図

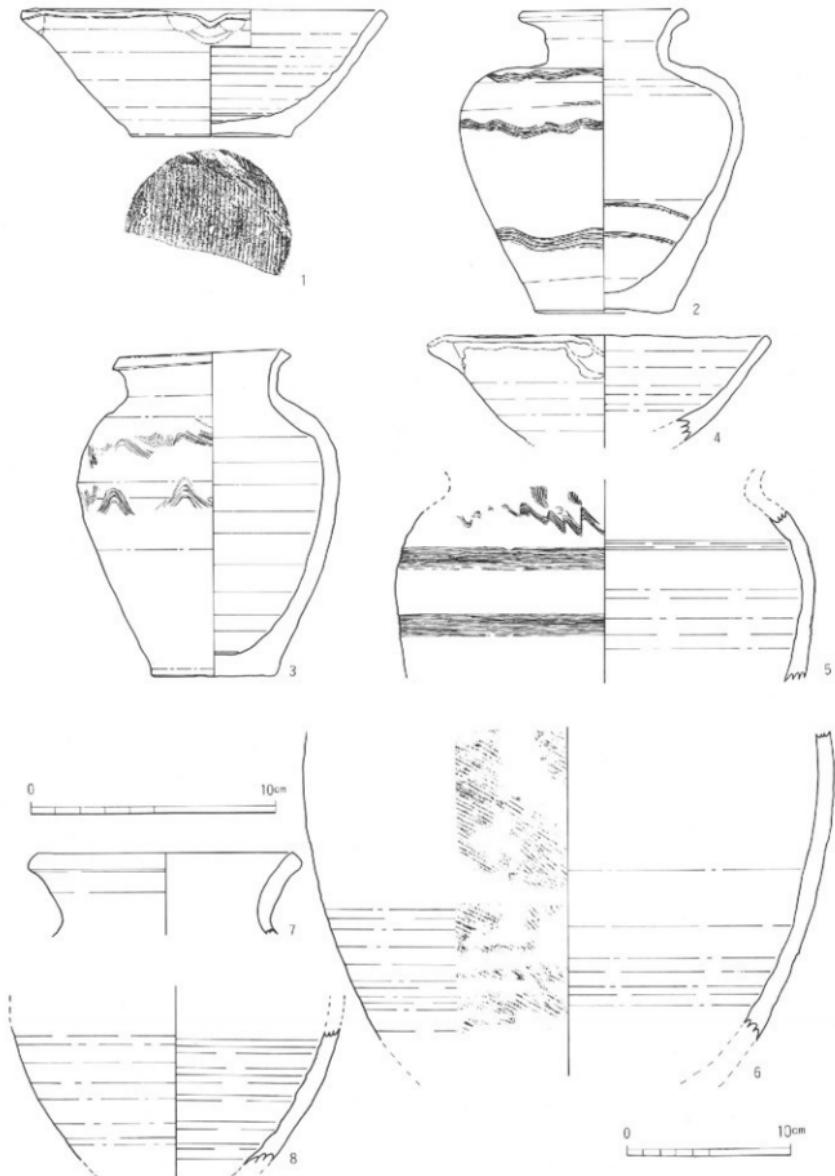


図版1 黒川上山古墳群周辺航空写真（約1／6,000）



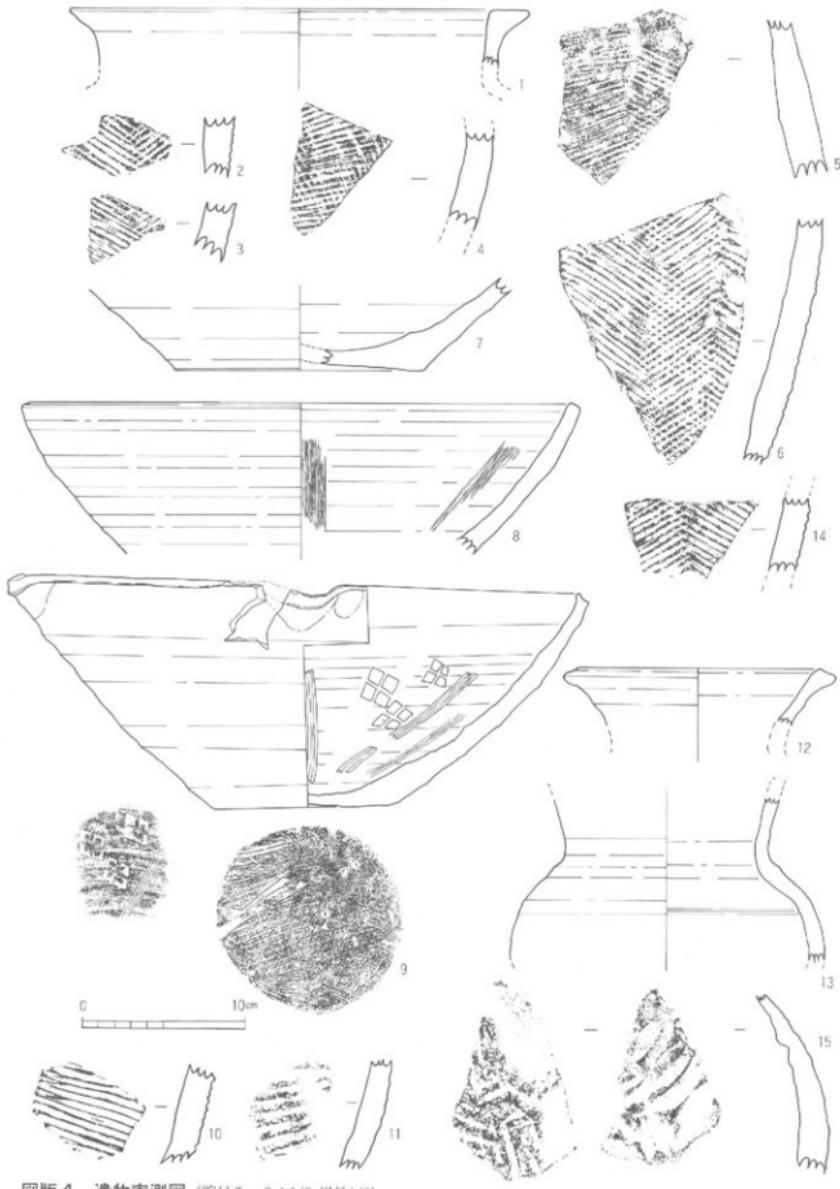
図版2 遺物実測図 (縮尺1~3・5・6:1/4, 4:1/3)

珠洲焼：2号墓出土藏骨器



图版3 遗物实测图 (缩尺1~6·8:1/3, 7:1/2)

珠洲碗1·2·2号墓出土藏骨器, 3·3-1号墓出土藏骨器, 4:6号墓, 5:2-1号墓,
6·8:1号墓周溝, 7:2-2号墓

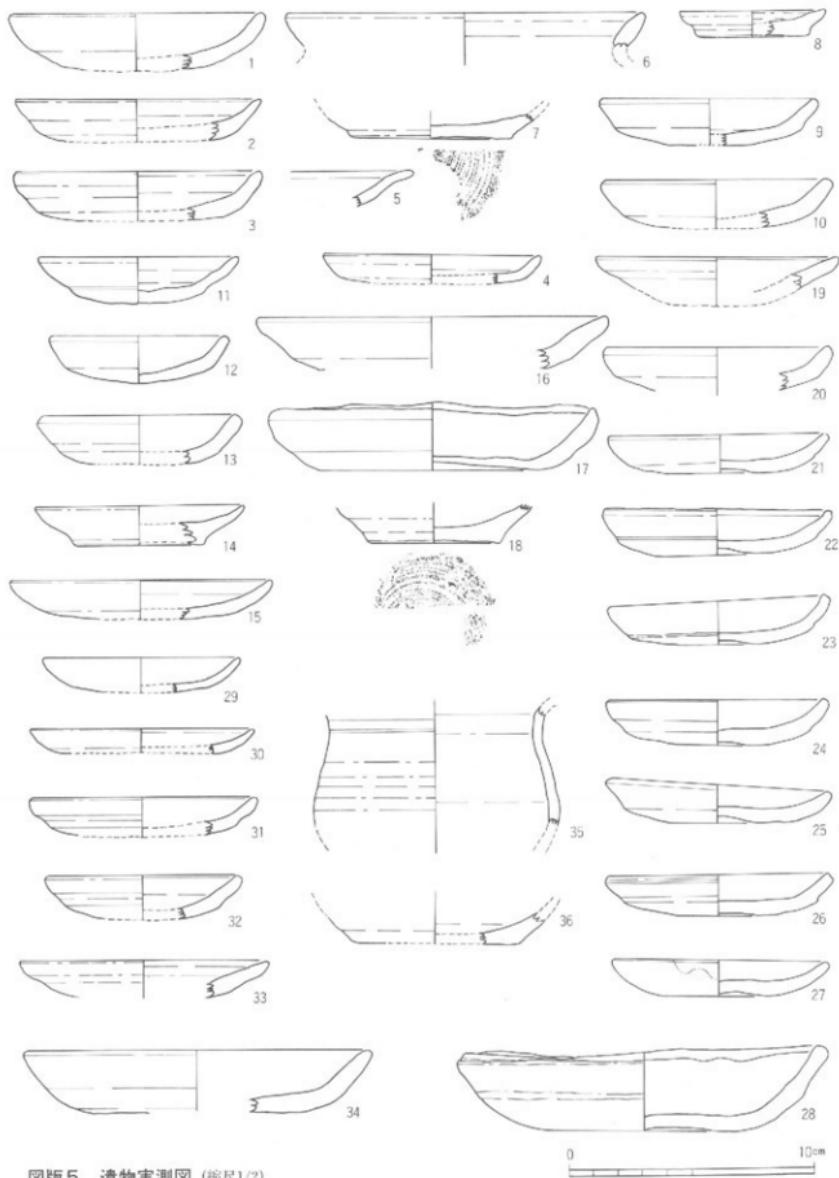


图版4 遗物実測図 (縮尺7~9:1/3, 以外1/2)

珠洲焼 1~4・7:3-1号墓, 5:2号墓, 6~14:9号墓,

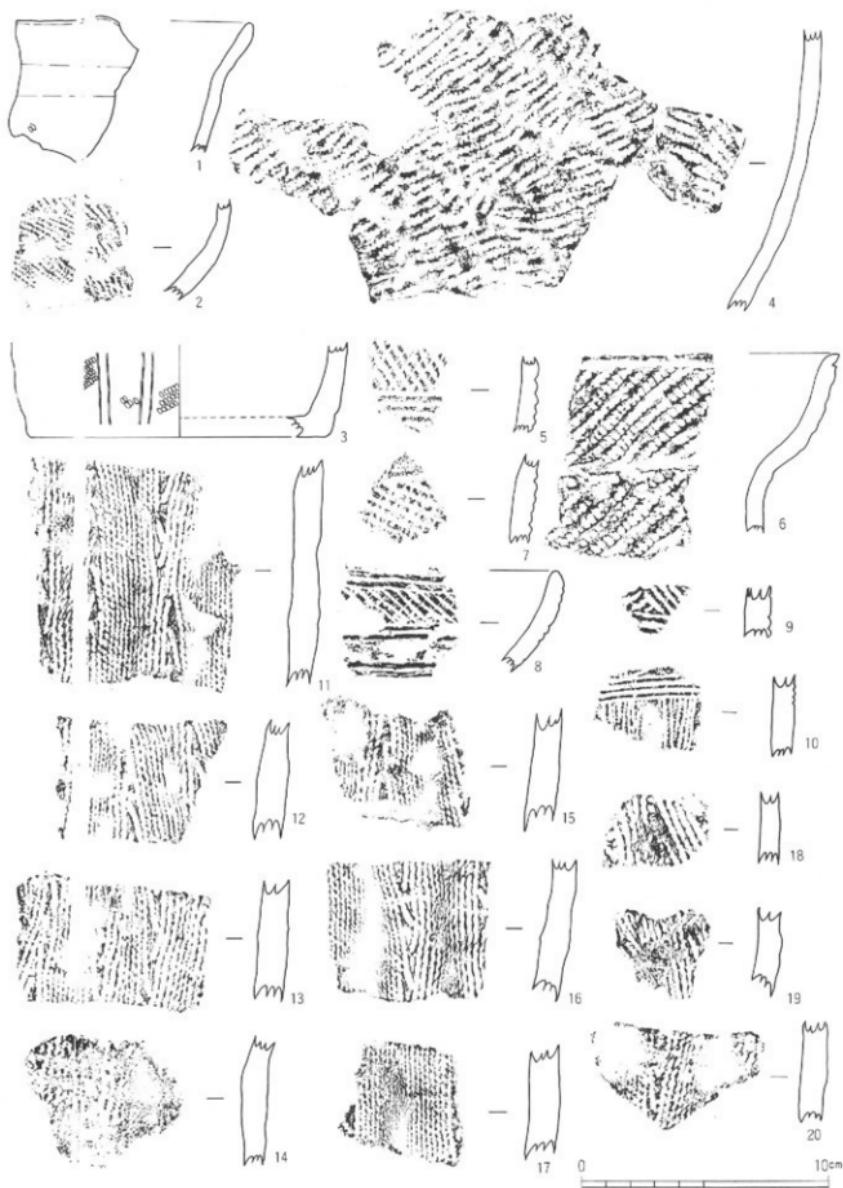
8~15号墓, 9~10:3号墓, 12:6号墓

須恵器 13:7号墓, 14:4号墓, 15:1号墓周溝



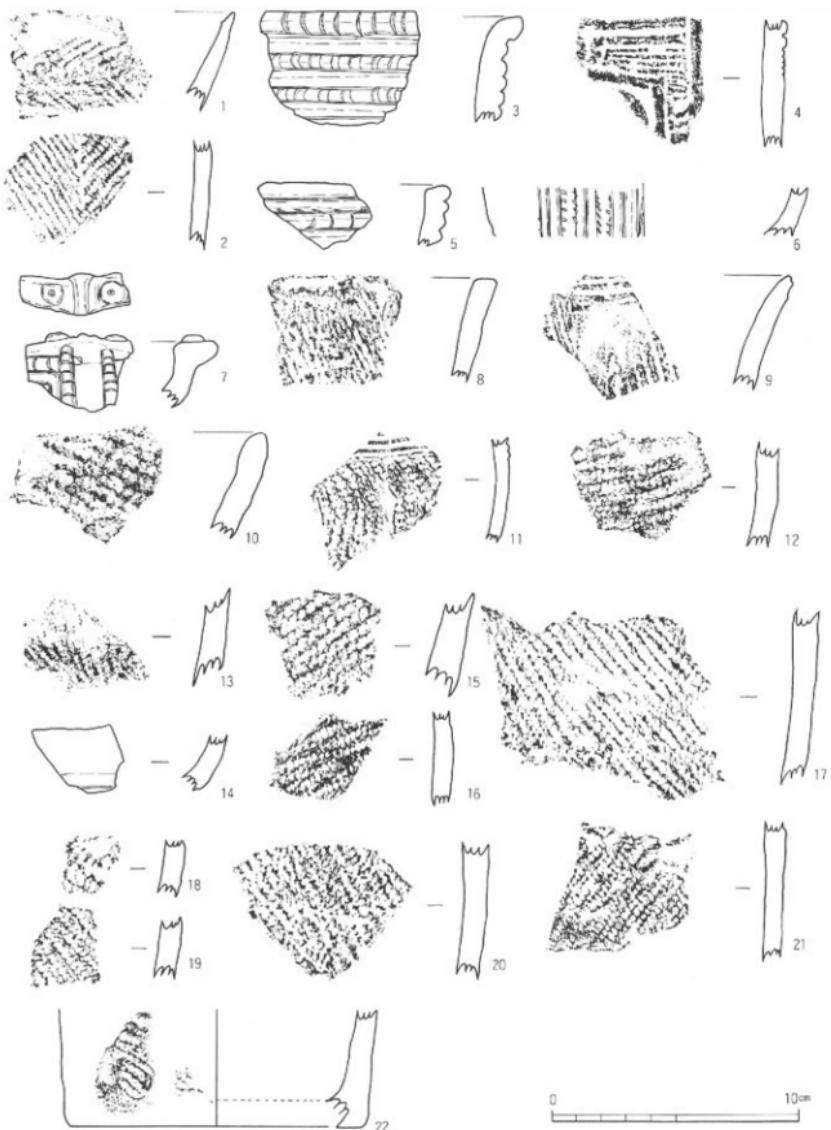
図版5 遺物実測図 (縮尺1/2)

土師皿 1~3 : 1号墓周溝, 4: 2~2号墓, 5: 3号墓,
6~7: 4号墓, 8~10: 5号墓, 11~18: 6号墓,
19~20: 7号墓, 21~28: 8号墓, 29: 15号墓, 30: 16号墓,
31~34: 17号墓, 35~36: 18号墓

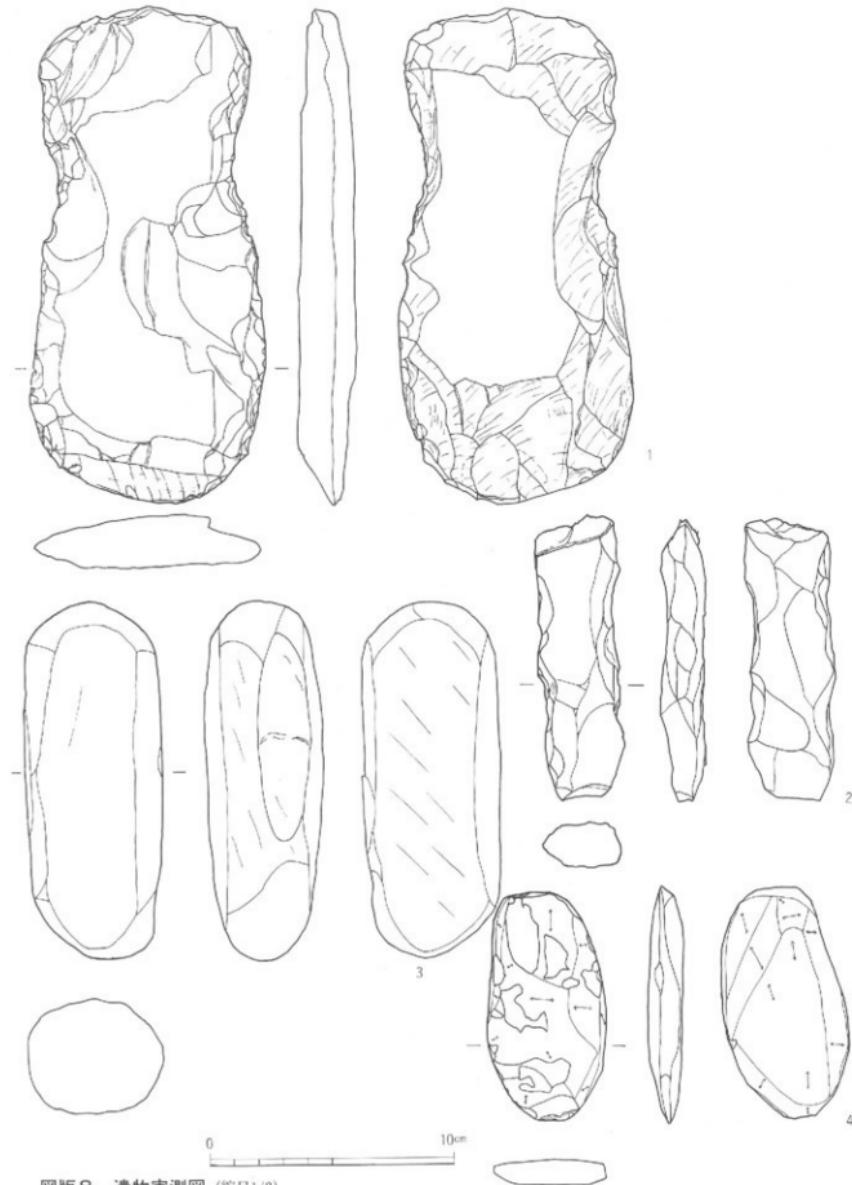


図版6 遺物実測図 (縮尺1/2)

縄文土器 1 : SD01, 2・3 : P12, 4・5 : P8, 6 : P5, 7~20 : 遺構外

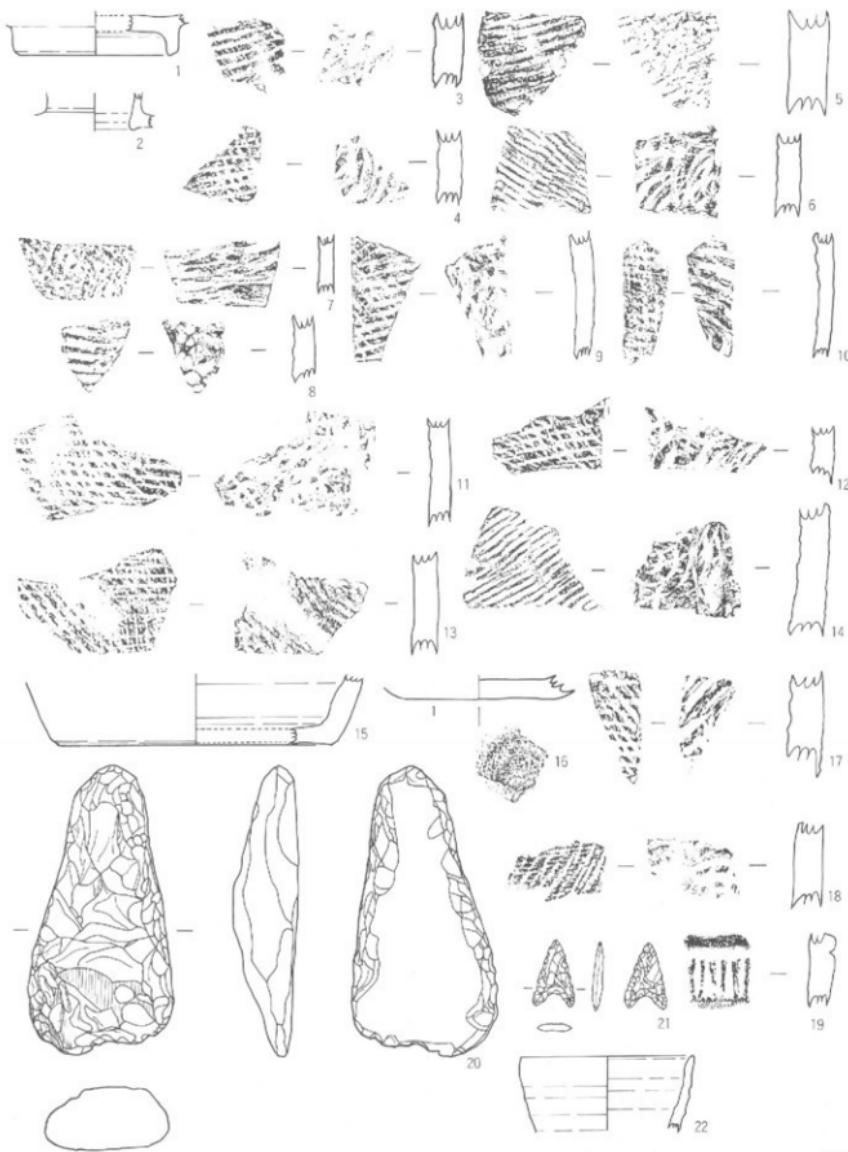


図版7 遺物実測図 (縮尺1/2)
縹文土器 1~22: 遺構外



図版8 遺物実測図 (縮尺1/2)

石器 1:造構外, 2:P13, 3:P5, 4:造構外



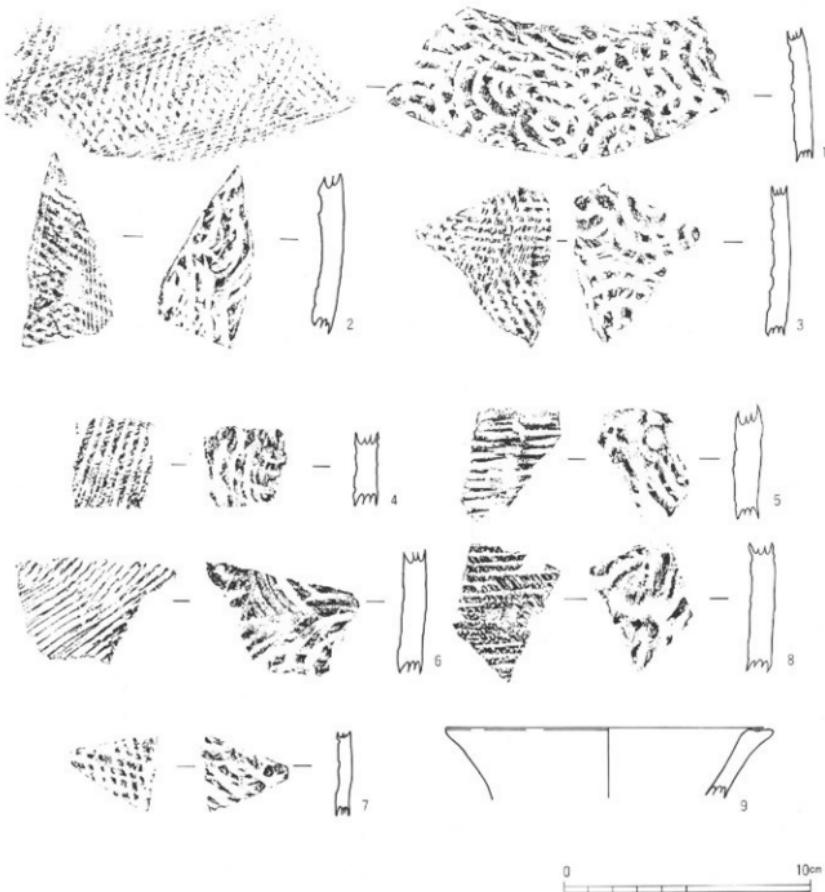
図版9 遺物実測図 (黒川塚跡東遺跡, 縮尺1/2)

須恵器 1~16: No.1 トレンチ, 17~18: No.2 トレンチ

繩文土器 19: No.3 トレンチ

石器 20~21: No.3 トレンチ

越中瀬川 22: No.3 トレンチ



図版10 遺物実測図 (黒川探跡発掘跡)

須恵器 1~4: 1号窯, 5~6: 2号窯, 7: 4号窯, 8~9: 3号窯



図版11 1.遺跡遠景(空中写真), 2.遺跡全景(空中写真)



図版12 1. 遺跡全景(北東より), 2. 遺跡(北西より), 3. 1号墓(北西より)



图版13 1. 2·2-1·2-2号墓，2. 2号墓藏骨器·五轮塔检出状况，3. 2号墓藏骨器出土状况
4. 2-2号墓，5. 2-2号墓藏骨器出土状况



図版14 1・3号墓・4号墓(北西より),
4・3-1号墓藏骨器出土状況,
2・3号墓(北西より),
5・4号墓

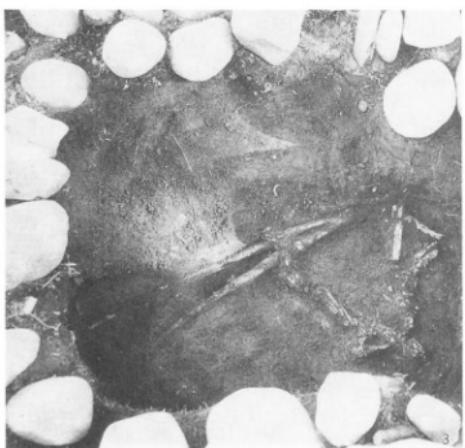


図版15 1. 5号墓(南東より), 2. 6号墓(南西より),

3. 7号墓断面(北西より), 4. 6号墓主体部



図版16 1.8号墓(北東より), 2.8号墓断面(北より), 3.土師質皿出土状況
4.9号墓(北より), 5.10号墓(北より)



図版17 1.11号墓(東より), 2.11号墓主体部検出状況(北より), 3.11号墓主体部人骨出土状況(北より)
4.12号墓(東より), 5.12号墓主体部(北より)